

帝國讀本

新制第二版 卷五

3759

Ha7

資料室

41576

教科書文庫

4

810

41-1934

2000301553

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

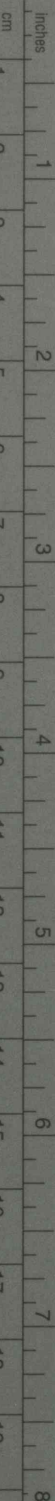


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文學博士 芳賀 矢一 編
文學博士 上田 萬年
文學士 長谷川 福平 訂補

帝國讀本

新制第二版

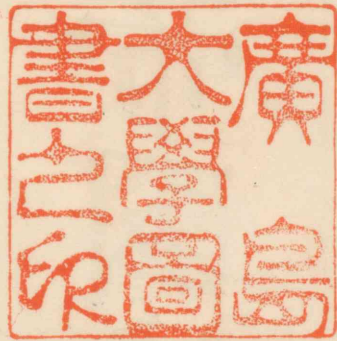
文部省檢定
昭和九年十一月二日
中學校國語漢文科用

合資會社 富山房發兌



北畠親房

染谷波光筆



修道中学校

第三學年第三班

No. 24

小林 乙二

帝國讀本 新制第二版 卷五

目次

一 春の山邊(古歌).....	一
二 櫻と我が國民性.....	三
三 大和を歩く.....	三〇
三輪、初瀬.....	一〇
多武峯.....	一六
國寶建造物の保存(自修文).....	一九
四 土の匂.....	三〇
長塚節.....	三〇
五 新生活の開幕.....	三五
生方敏郎.....	三五
六 阿新丸その一.....	三六
(太平記).....	三六

目次

一

七 阿新丸その二……………(太平記)…三
 八 松の下露……………(太平記)…五〇
 九 希 望(詩)……………土井晚翠…五
 一〇 日蓮上人……………高山林次郎…五
 日朗と日蓮(自修文)……………大佛次郎…六
 一 信濃路の旅……………正岡子規…七
 二 人と自然……………吉田絃二郎…八一
 三 東西の自然詩観……………本間久雄…七
 四 清 水(舌歌)……………鶴見祐輔…五
 五 道程を愛する心……………幸田露伴…一〇一
 六 海と日本文學……………内ヶ崎作三郎…二九
 七 長安の空……………二〇

海洋文化國としての日本(自修文)

八 夏の夕風(詩)……………武島羽衣…二五
 九 松葉仙人……………(十訓抄)…三〇
 一〇 高名の木のぼり……………吉田兼好…三三
 高名の木のぼり……………三三
 弓射る事……………三三
 人の心すなほならねば……………三四
 一一 水の美……………大町桂月…三五
 一二 歌物語……………藤原信實…四一
 上手の心……………(古今著聞集)…四三
 關の秋風……………(古今著聞集)…四三
 秋の青柳……………(古今著聞集)…四四
 松ものいはゞ……………(保元物語)…四七
 一三 白河殿夜討……………(保元物語)…四七



一 建武の中興……………	北畠親房……………一五
二 人臣の道……………	北畠親房……………一五
三 日本 <small>の</small> 國號 <small>(自修文)</small> ……………	大森金五郎……………一三
四 斷想四片……………	高島米峯……………一六
五 我等は若い……………	……………一六
六 人生の一樂……………	……………一六
七 國民の富は國家の富……………	……………一六
八 國威八紘に振ふ……………	……………一七

帝國讀本 新制第二版 卷五

一 春の山邊

(一)平安時代の歌
 人業平の孫
 天曆七年(一
 六三三)歿
 年六十六

(二)平安時代の歌
 喜者一人延
 喜七年(一
 六七)歿
 年四十九

(三)平安時代の歌
 僧俗稱良歌
 支利僧正通
 昭の子清和
 天皇(一五
 八)に仕へた
 歿年不詳

かすみたつ春の山邊は遠けれど
 吹きくる風は花の香ぞする

月夜にはそれとも見えぬ梅の花
 かをたづねてぞ知るべかりける

見わたせば柳さくらをこきまぜて

在原元方

凡河内躬恆

素性法師

みやこぞ春の錦なりける

よみ人知らず

さくら狩雨はふり來ぬ同じくは

ぬるとも花のかげに隠れん



蹟筆沖契

契

沖

霞とも雨とも空はわかぬ間に

たまぬきそむる青柳のいと

よみ人知らず

をしめども春の限りのけふの日の

夕ぐれにさへなりにけるかな

花見つし分
れは浅し
ら雲のおく
よし野の山
契
江戸時代の學
僧攝津尼ヶ
崎の元祿
六十四年(二
六十二年)寂
六十二年

(一)哲學者、文學
博士、東京帝
國大學教授、茨
城縣に生れた。
思想と人格、
思想と國家、
國民思想の批
判的研究等の
著がある。
咲きも残らず
散りも始めず

二 櫻と我が國民性

一

深作安文

櫻花には梅花の清楚はない。薔薇の濃艶はない。桃花の豊麗、牡丹の富貴もない。海棠の妖艶、菊の高逸もない。けれども、その咲きも残らず散りも始めぬ爛漫たる樹頭に、鮮かに朝日の照添ふ趣は、げに百花の王たるに恥ぢないのである。長堤十里、若しくは全山雲か霞か、人をして思はず快哉を叫ばしめる壯觀は、實に櫻に限るのである。朧月夜の櫻花は、人をして恍惚として花神に接するの思あらしめる。巨松の間に錯落する櫻花の、松は愈、翠に、花は愈、白いのは、またとない眺である。その他、春雨に濕ふもの、夕陽に映えるもの、高閣に配するもの、池水に臨むもの、名刹の花、古都の花、何れも見ざる者をして、我が國で花といふ名が全く櫻花の獨占する所となつた事の、更

に異しむに足らぬ事を思はしめるのである。

二

若し以上を櫻の自然美と言ふならば、これが歴史美もまた一入の趣をもつてゐる。花は櫻木、人は武士。櫻花は花中の花であつて、往



(筆崎香口谷)關來勿

時にあつては武士は人中の人であつた。昔から櫻花と武士とはその因縁甚だ深いものがある。勿來關外、馬上槊を横たへて紛々たる落花に逝く春を惜しんだのは八幡公である。一たび鎮西へ落延び

(一)源義家

(一)陸奥守平忠度、
壽永三年(一一八四)年、
八四四年(一一八五)年、
の谷(一)戦死、
年四十一、
(二)藤原俊成、
久元(一)年、
六十四(一)年、
九十一(一)年、
(三)二十卷、
河法皇の院宣、
治三年(一一八四)年、
四七年(一一八七)年、
俊成が撰した、
後成が撰した、
(四)一、
志賀の都は荒れに、
な、
(五)美作國(岡山縣)苦田郡院山庄にあつた、
醍醐天皇の行在所、
(六)「天莫(一)シ、
踏(一)時非(一)無(一)ニ、
范(一)蠶(一)」、
(七)兒島高德、
(八)百敷の大宮、
人はいとまあれや櫻かざし

ようとして淀より京に引返し、師の門を叩いて歌集を託し、せめて一首を敕撰集に留める事が出来れば、たとひ死んでも生きてゐると同じであると言つたのは平薩州である。俊成卿は感涙を流してこれを受納し、千載集を撰するに當つて、よみ人知らずとして、かの「さ、なみやの絶唱を採録したのである。深夜竊かに行宮の櫻樹を削つて一詩を題し、人臣の至誠を雲上に奏して、叡慮を安んじ奉つたのは、備後三郎である。若しそれ吉野朝と櫻花との關係に至つては、千載の下、人をして言ふべからざる感慨にその袖を絞らしめる。

三

櫻花の季節はいはゆる春風飴蕩、一年中の最好季節である。我が國民は上下を問はず、貧富を論ぜず、春服を纏ひ、嬉々として行樂を恣にする。かの「百敷の大宮人は、殿上人の櫻狩を詠じたものであつて、春の日の長閑さが目の前に見える心地がする。夜嵐や太閤様の

て今日も暮し
つ「新古今集」
の園女の句。
芭蕉の句。

(一)一年歳歳花
相似。歳歳年
年人不同。
(唐の劉廷芝)

靈感に觸れる



(筆州櫻原野) 見花の醍醐

櫻狩は、豪華を極めた豊太閤の醍醐の花見を詠んだもので、木の下に汁もなますも櫻かなは、江戸時代の花見を描いたものである。花神の殊寵を蒙る我が國民の如きは、眞に世界にその類例を見ない所である。言ふまでもなく、年々歳々花は相等しいけれども、これを見る者は年毎にその齡を加へつあるのである。然るに一たびこの花に對すれば、何人も老の將に至らんとするを忘れるのは、誠に不可思議の事ではあるまいか。そは蓋し、その刹那、美感に打たれ、靈感に觸れて、花や人、人や花、花と人とが渾然融合

東方君子國

(一)東京市四谷區
新宿にある。

し去るが爲であらう。これに由つてこれを觀れば、櫻花は東方君子國の精華であつて、正に我が民族の趣味精神の象徴である。古來櫻花が我が國民性を陶冶する上に偉大な力のあつた事は、これを想像するに難くない。觀光の爲、外人の我が國に來る者は、櫻花の季節に最も多い。さうして彼等は、長くも觀櫻の御宴に新宿御苑に御招待を蒙るのを以て無上の光榮とし、かくして純日本趣味を心から味解するのである。

四

櫻花と我が國民性とを對照してみると、驚く程の類似若しくは一致を見出すのである。櫻花は陽春三月に開いて、至つて陽氣である。世間的、樂天的である。梅の隱逸はこれをこの花に認める事は出來ない。況して蓮の厭世をやである。我が國民性もまた然りである。由來我が國民は快活であつて、少しも厭世的傾向がなく、極めて世

Chahia

間的、樂天的である。これその一。

櫻花の色はいはゆる櫻色であつて、淡紅であり、澹泊である。董の濃紺もなく、^(c)ダーリヤの深紅もない。我が國民性もまたその通りである。我が國民は古來澹泊を愛し、正直を重んじて、物に執著がなく、事に凝滞がない。儒教が入り、佛教が入り、西洋文化が入つて、容易に我が文化に同化されたのも、一にこれが爲である。これその二。

櫻花は密集して開くものであつて、極めて賑やかである。これを眺めるには、例へば、吉野の一目千本といふ様に集團的なものがよい。唯一本の櫻、活花の櫻、盆栽の櫻はさまで人目をひかない。全山皆櫻、滿堤悉く花であつて、始めて眞の櫻花美を窺ひ知る事が出来る。大和民族もまた然りである。もと家族制を以て立つた國だけあつて、國家的觀念が甚だ強く、國民的結合が極めて堅い。その外國と難を構ふるに當つて、愈、その一致團結を堅くする。これその三。

五

我が國の櫻は、花はあるけれども、果實は殆ど言ふに足らぬ。唯その花は壯美秀麗、遙かに百花に抽でて、誠に理想的の花である。我が國民、殊に武士は頗るこれに似てゐる。その純忠、勇敢、清廉、質素等の諸美德は、一定の主義理想から導き出され、この主義を實行し、この理想を實現せんとして、彼等は努力し、死もまたこれを辭せぬのが武士の本領である。櫻花が大和魂の具現、武士道の表彰として、武士の理想を寓する所となつたのは、全くこれが爲である。これその四。

櫻花は忽ち開き、忽ち散る。開落共に慌しい。一日見る事を怠ると白雪滿地、しかも新緑は已に樹頭に上るのである。その散際は極めて美しく、極めて澹泊で、微塵も未練がましい所がない。櫻花が武士の精神と相通ずる所のあるのは、一にはこれが爲である。武士の生命とする所は犠牲的精神にある。名を惜しんで命を惜しまず、君の

神州正大の靈氣

(一) 俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。觀音巡禮。京洛小品。山川風景の著者。ある行住等が

馬前に討死するを以て無二の本懐となし、無上の光榮とするのである。これを要するに、櫻花美と武士美とは二にして一、一にして二、神州正大の靈氣が凝つてこの花となり、この人となつたものと謂ふべきであらう。

— 倫理と國民道德 —

三 大和を歩く

三輪、初瀬

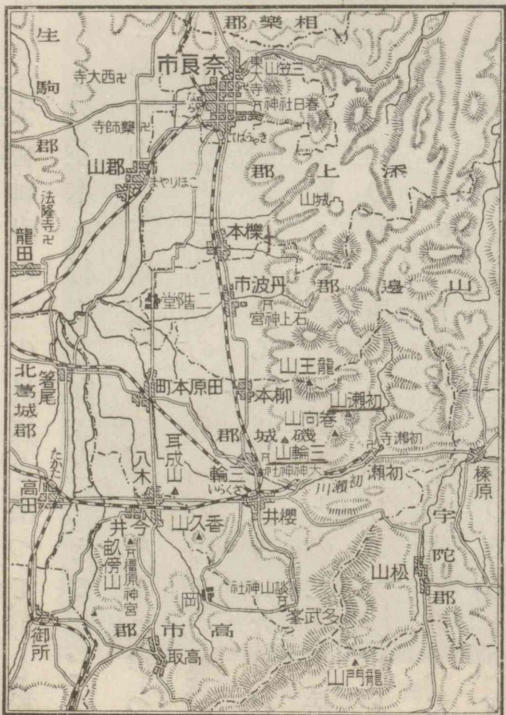
(一) 荻原井泉水

毎日降つたり曇つたりしてゐた花時の空が、この日はくつきりと晴れて、美しく拭ひ取つた様な麗かさであつた。桃畑梨畑などが花をつけて一二反づゝ、所々汽車の窓の右手にも、左手にも見渡された。櫻も山の裾に、藪の前に、野路の傍に、または停車場の構内にも咲いて、盛はちと過ぎたけれど、見所は十分にあつた。京極、櫨本、丹波市、柳本などといふ驛の名からして、大和らしく長閑な感じだつた。

Trail

汽車路に沿うて小さい溜池が多くあり、その水が晝近い光をきらきらとたゞへて、外を眺めるにまぶしいくらゐだつた。私は三輪でおりました。

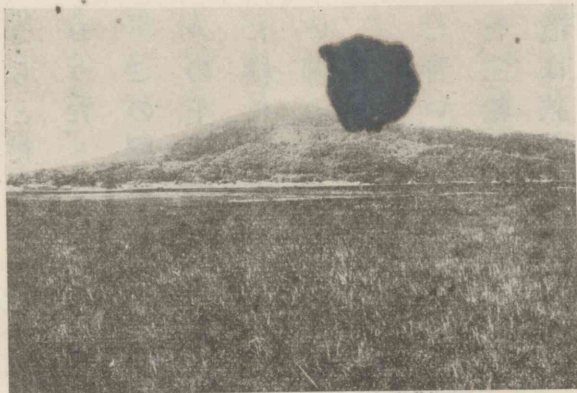
この驛の櫻は、^(一)ルの上に雪をふらした様に散つてゐた。高い柳の木が地に届くくふさくとし、た青い絲を垂れてゐた。三輪の町の昔の街道は狭い。町一杯になる程の大きなあめ色の牛が、荷を牽いて通つてゐた。
「金魚や——金魚——」。



(一)官幣大社。三輪町三輪山にある。

吟懐

發祥地

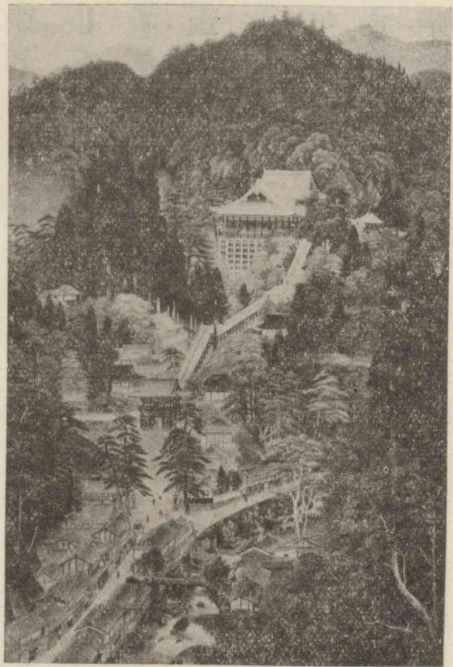


どの家も、晝寝でもしてゐる様に森閑として、子供すらも出てゐない。

大神神社の一の鳥居を潜つて、杉と松との並木を行くと、向ふに見えるなだらかな山が三輪山である。その左手にがつしりとして高いのが卷向の山、その奥が弓月嶽なのであらう。爪先上りになるにつれて、顧ると、畝傍と耳成との二つの岳は、三輪の町の屋根の上にもちよつぴりとも見える。このあたりは萬葉時代の歌人たちが、吟懐を恣にした所なのである。見方によつては、このあたりこそ日本詩歌の發祥地であると言つても、よい。雲雀がひつきりなしに囀つてゐる。

(一)奈良縣磯城郡上ノ郷に發して、佐保川と合流して大和川となる。

二の鳥居を入る頃から、日光と陰影とのくつきりした木立となつて、その清らかな參道の行きあたる所に拜殿があつた。拜殿には御簾がさげてある。さて本殿はと見ると——それは社殿として作られてゐない。即ち大神神社はこの山を以て神體とするのである。その三輪山は、青い松が美しくすい〜と生ひそろつて、誠に玲瓏たる姿である。櫻井から初瀬へは、昔の道筋を通つた。初瀬川に沿うて、當今は寂しい家が並んでゐるだけだが、さうした家の軒下からは、青い草が



(兼光朝本山) 谷 長

(一)新義真言宗豊山派の總本山。磯城郡初瀬町。五年(一三三八)天武天皇の爲に築いた塔婆を以て起原とする。

びつしりと伸びてゐた。またこのあたりには椿が非常に多く、川の水をせくくらゐに、花が川の中にも落ちてゐた。長谷寺は今が櫻の盛だつた。樓門を入ると、この寺に名高い牡丹が並んでゐる。その赤らんだばかりの牡丹の芽を暖かい感じに見ながら廻廊を上ると、練塀の上からだらりとしてゐる枝垂櫻や、崖の下から枝を捧げてゐる八重櫻が、爛漫としてゐた。観音堂の舞臺から見おろすと、この溪間はさながら大きな壺の様で、その壺に花を盛つたといふ感じであつた。

私はこの長谷寺へ二年前にも詣でた事がある。その時は三十三所の巡禮として來たので、春の朧々とした夜であつた。納經所の窓口ももう締るばかりの所で、寺僧は私の爲に御判を押すと、灯を消して去つてしまつたので、堂内は暗く、お籠りでもする人の爲にしつらへたらしい一段と高い疊敷に、夜風が薄寒く漂うてゐたが、そ

れでも

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

この芭蕉の句も思ひ出されたのであつた。

今日は夕日が美しい。この溪は西へ口を開いてゐるので、其所から流れ込む夕日がまともなのである。舞臺から左手へ、地藏堂、大師堂などと、山の中腹に建つ諸堂に沿うてある路を略半周すると、夕日に照映える観音堂を正面に眺める事になる。そして堂を圍む様にたなびいてゐる櫻の花が、聖なる雲の様である。私は花の名所としての初瀬を、今日始めて見たといふ氣がした。諸堂を連ねる山腹の路も静かでよい。自分の下駄の音がからころとその石道に響くのが寂しいくらゐで、そこの枝にゐる小鳥も、その音に驚きもしない。

足駄はく僧も見えけり花の雨

聖なる雲

(一)姓は南。芭蕉の門人。曾て罪あつて配流され、元禄五年(一七〇〇)歿。

(二)多武峯にある談山神社の大鳥居。

芭蕉と一緒に來た世を忍ぶ杜國(一)が、この寺での句である。その時
もやはりこの様な花の盛であつたと見える。足駄をはく僧の姿に
殊更感興を覺えたらしい杜國の氣持は、しつくりとは分らないけ
れども、足駄の音が長い石段にさゝやいて行く憂鬱らしい感覺な
ども、彼の心をそつたのである。三輪から多武峯へは、櫻井を通つ
て約二里であらう。私は、三輪は先に寄つて來たから、初瀬から櫻井
を過ぎて多武峯へ。——櫻井では最後の乗合自動車に間に合つた。
道がひどく荒れてゐるので、飛上らせられる様に揺れるのであつ
たが、運轉手はそんな事には頓著せず、もう暗くなる山路を、しやに
むに突進させた。大和第一の石の鳥居(二)といふのも、車の中からちら
りと見たばかりで過ぎた。

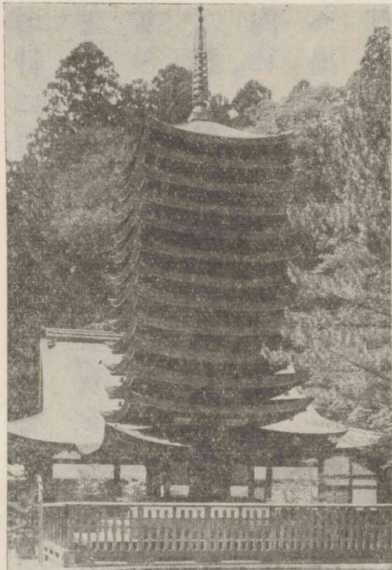
多武峯

小鳥の聲——水の音——眼が覺めると、雨戸をたてない硝子戸

を通して、水の様な春の朝がひた／＼と澄んでゐた。小鳥の聲は、裏
の楓の林で囀つてゐるのらしく、水の音は、宿とは道一つだけ隔て
てゐる祓殿の御池に落ちる清水なのである。老梅が一本、檜皮ぶき
の軒に白い貝殻の様な花を散して居り、百日紅の枝からは、露がほ
とほとと垂れてゐた。夜を籠めて月がさえた爲か、木も草もしつと
りと露を帯びてゐるのだつた。

談山神社はこの宿のすぐ上にある。いやこの宿が談山神社の境
内にあるといふ方が當つてゐる。私は冷たい山水で顔を洗ふと、外
へ出て見た。境内は、一本の塵も止めない様な清らかさに、軽く水を
打つた様に濕つてゐる清々しさ。石段を登ると、拜殿は、下から高い
柱を立てて乗出す様な形に作つた朱の廻廊であり、それに續いて
本殿があり、名高い十三重の塔は少しおりの平地に立つてゐた。此
所を俗に關西日光と稱する譯は、徳川氏が日光廟の工を起す時、範

權殿
(一)土佐家一派の
畫風、土佐隆
能を祖とする。



多武峯三十重塔

を此所に取つたからである。規模の大小は比較にもならないが、模型的によく纏つてゐる。つゝ、美しい美しさはある。十三重の塔は繊麗な線の重疊した感じといひ、古雅な色の落著いた感じといひ、眺めて飽く事がない氣がした。私はそれから向側にある岡にも上つて見た。前日に春の祭があつたさうで、青年たちが御旅所の屋根にふいた杉葉をおろしてゐた。この岡からは丁度目の高さに、本殿や十三重の塔や、その下に配置された末社や權殿が、松の木の間に見えられる。その風景は、古い土佐派の繪を見る様な美しさであつた。社殿を朱に色どりぬいた松の翠のうつとりとした色は、その後

の山の茂りに續いて、神々しくも古びてゐる。今日も好い天氣ときまつた。私は芭蕉の跡を追うて、此所から吉野へ出ようとして、古地圖なども用意して來たのである。

——芭蕉を尋ねて——

自修文

國寶建造物の保存

關野貞

我が國の建造物は、西洋諸國のが石造や煉瓦造であるのとは違つて、昔から木造本位で通して來た。その主な原因は、我が國土が森林に富み、檜や、けやきや、杉や、さはらや、つがの様な建築的良材の供給が豊富であつたからと、木造建築が最もよく我が國の風土、氣候に適應して居つたからとである。また我が國の様に頻繁に地震に襲はれる所では、今の様に鐵骨構造や鐵筋コンクリート構造の發明される以前には、木造建築が石造や煉瓦造の建

(一)建築學者、工學博士、東京帝國大學名譽教授、明治元年新潟縣に生れた。
さはら(樺花柏)
つが(梅)
鐵骨構造
鐵材を骨組とする家屋の構造。
鐵筋コンクリート構造
鐵棒とコンクリートとを組合せて鑄固める構造。

耐震的
地震に耐へる
性質のある
いふ。

建築様式
主として趣味
の上から出
づから造り
られた建築
型その型に
は國民や國
の性質によ
る種々の物
がある。

築よりも、一層耐震的であつたのである。
しかし、木材は腐朽し易く、且火に最も弱い缺點がある。それにも拘らず、我が國には古建築の遺存してゐるのが比較的多く、千三百年來の木造建築を、各時代を通じて殆ど缺陷なく今日まで保存してゐる。これは全く外國には類例のない事で、實に世界の奇蹟と言つてもよい。

我が國には千年以前に建てられた建築は約三十許遺つてゐるが、世界の何れの國に於ても、千年前の木造建築は絶対に存在してゐない。また我が國には、六百年前即ち鎌倉時代頃より前の建造物は約三百も遺つてゐるが、昔時、我が國に立派な建築様式を輸入して、我が國の建築の發達を助けた朝鮮には、六百年前の物が唯一棟遺つてゐるに過ぎない。支那は大國であるに拘らず、六百年前の物は僅か十棟か二十棟しか遺つてゐない。即ち東洋の古代建築の實例は、主として我が國に於てのみ多くこれを見

文化史
學問、藝術、政
治、教育、風俗、
經濟等の歴史
を研究して歴史
會の發達變遷
を明らかにす
る歴史。

る事が出来るのである。

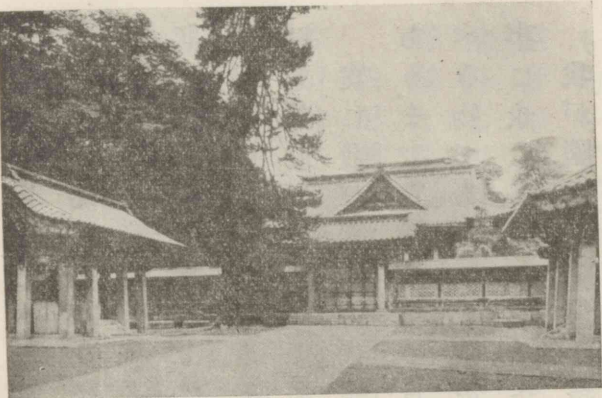
斯様に古代の木造建築が多數我が國にのみ遺存してゐるのは、いかなる理由であるか、それには色々の原因があるが、その根本原因は、畢竟萬世一系の皇室を戴いてゐる我が莊嚴な國體の賜である。他の國々では幾度かの革命の變亂があつたり、また外國の侵略を受けたりした結果、古い建造物は次第に破壊され、消滅してしまつたのである。

實に我が國の古い建造物は、我が國の文化史の活きた證據であり、また東洋建築の貴重な代表者であつて、大いに世界に誇るべき物であるから、我が國民には十分にこれを愛護し、これを無事に永く子孫に傳ふべき義務がある。

我が國に於て最も多くの古い建造物をもつてゐるのは古社寺であるが、この古社寺の中には、明治維新後經濟上の關係から十分に保護する力がなかつた爲に、貴重な建造物中にも、次第に

國庫
國家の資産を
統一して保管
する所

(一)芝公園内には
徳川二代將軍
徳川靈屋及
裏方靈屋將
軍、同六代將
軍、同七代將
軍の靈廟が
あり、野公園
内には四代及
び五代將軍の
靈廟がある。
(二)兵庫縣(播磨
國)姫路市一
名白鷺城。
(三)岡山縣(備前
國)岡山市一
名鳥城。

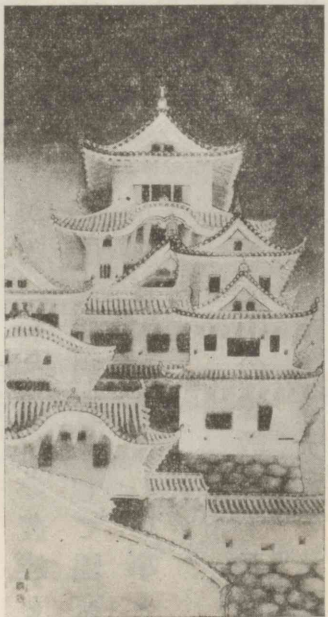


であるが、これ等は社寺に屬しない、或は個人の所有であつた

破損頽廢する危険に瀕した者もあつた。政府は茲に見る所があつて、明治三十年六月古社寺保存法を制定し、これ等の建造物の優秀な物を特別保護建造物に指定して、その破損の甚だしい者から、毎年國庫より相當の保存金を下附して修理を實行した。その爲に多數の古代建築の主要な者を、辛うじて頽廢から救ふ事が出來たのである。

然るに古社寺以外の建造物、例へば東京の芝や上野の御靈屋(一)の様な靈廟(二)建築、姫路城や岡山城の天守の様な城郭建築などは、その價値に於て決して古社寺の建造物に譲らない貴重な者

り、或は國有または公共團體の所有などであつたりする爲に、古社寺保存法ではこれを特別保護建造物に指定する事が出來ず、いかにその破損が甚だしくても、保護の途が全くなかつたので、心ある者は常にこれを遺憾に思つてゐた。昭和四年三月、政府は古社寺保存法の代りに、新たに國寶保存法を發布して、社寺以外の建造物も、その貴重な者は國寶に指定する事となり、また保存上必要な場合には、古社寺同様國庫より修理費を補助する事が出來る様になつた。



(筆香華路都) 城鷺白

かく新國寶保存法が出來た爲に、社寺以外の建造物で新たに國寶に指定された者を舉げてみると、昭和五年度に於て、江戸時

(一)愛知縣(尾張國)名古屋市の正守は加藤清た。
 (二)廣島縣(備後國)福山市
 (三)廣島縣(安藝國)廣島市
 (四)貴族院議員池田仲博

(五)奈良縣生駒郡法隆寺村・法隆寺の本山・法隆寺(推古天皇の七年)聖德太子の開創。
 (六)同郡富郷村。法隆寺の末寺。
 (七)同村。眞言宗。京都東寺の末寺。

代を代表する壯麗華美な芝や上野の靈廟があり、同六年度に於て、公共團體の所有では、從來離宮であつたのを名古屋市に御下賜になつた名古屋城の天守や御殿があるし、國有では姫路城の天守、福山城の天守、廣島城の天守があり、他に池田侯爵家所有の岡山城の天守などがある。これ等我が國に於て獨得の發達をなし、世界に比類のない靈廟建築や城郭建築が、國寶として國家の保護を受ける事が出来る様になつたのは、誠に喜ばしい事と言はなければならぬ。

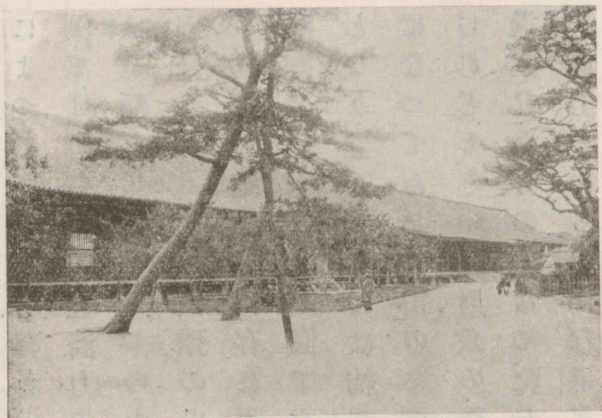
昭和八年末までに指定された國寶建造物の總數は千五百棟であるが、その中には、世界最古の木造建築である大和の法隆寺の金堂、五重塔、中門、廻廊、並びに法隆寺の近くにある法起寺及び法輪寺の兩三重塔がある。何れも千三百餘年前の者で、かゝる古代の建築が、獨り我が國にのみ保存されてゐるのは、實に世界の驚異である。また世界最大の木造建築では東大寺の大佛殿があ



鳥城池田遙村筆

(一) 京都市下京區
 本名は八幡山
 教王護國寺
 本山言宗の
 總本山今同
 宗東山派の
 本山その大
 重塔の高さは
 五五メートル
 五五メートル
 天台宗本山
 蓮華王院
 堂の長さ六十
 四間五尺六寸
 間毎に柱が二
 つて三十三間
 と三十三間の
 と稱せられる

真相
 まことのあり
 さまほんた
 うのすがた



る。世界最高の木造建築では京都の東寺の五重塔がある。世界最

長の本造建築では京都の三十三間
 堂がある。尤も石造や煉瓦造の建築
 では、外国にはもつと大きなもつと
 高い、もつと長い建物もあるが、木造
 建築では、我が國の今舉げた建造物
 に及ぶ者はない。次に世界最美の建
 築の一に數へられ、また實際木造建
 築としては確かに世界最美を誇る
 事が出来る日光の靈廟がある。

これ等の外、どの國寶建造物も、そ
 れぞれの時代の様式を代表して、昔
 時の文化の真相を語るのみでなく、支那や朝鮮に於て早く消滅
 した東洋建築の様式を代表してゐるのである。

（一）歌人、小説家、大正四年、山鳥の渡等の著があり、集に收められてゐる。

ぢみな菅

蟄居

春は空からも、土からも、微かに動く。毎日の様に、西から埃を巻いて来るはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふはくして綿の様に白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふ様に、じつと動かずにゐる事がある。水に近い濕つた土が、暖かい日光を念ふ一杯に吸つて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃のはんの木のぢみな菅は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひらくと動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態にありながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くくくと鳴き出す事がある。空から射す日光はそろくと熱度を増して、土はそれをいくらでも吸つて止まない。土はすべてをだんくと刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、その他の草が空と

四 土の匂

長塚節



長い睡眠から復活した事を空に向つて告げる。それで遠く聞く時には、彼等の騒がしい聲は、唯空にのみ響いて、快げである。

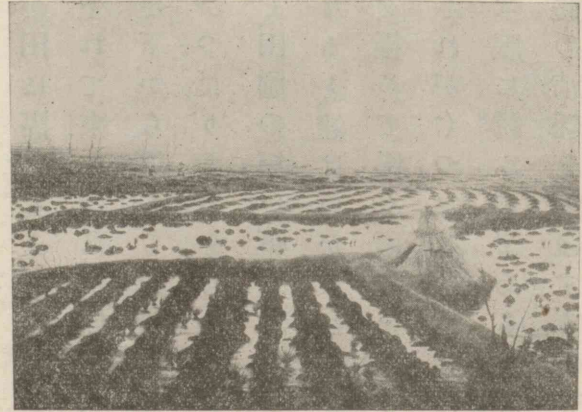
彼等は更に、春の到つた事を一切の生物に向つて促す。草や木が心附いて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちには、鳴く事を止めまいと力める。田圃のはんの木は疾うに花を捨て、自分から先に、嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽やかな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼空の下に

本性

田を抱へて、周囲の林は漸くその本性のまに、勝手に白つほいのや、赤つほいのや、黄色つほいのや種々に茂つて、それが氣が附いた時に、急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて羞しうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雑木林の間には、また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて、春がふけたと呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空を支配してゐる。べきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を押し去らうとして、互の身體を飛越え、鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬ様に、その身を遙かに燿く日の光の

中に没して、その小さい喉のちぎれるまでは、激しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴きほこつて、かしの木の様な大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に著いてゐたすべての雑草が爪立して、唯空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行する事を好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘々に手に農具を執る。紺の股引



春 耕 (川邊菊二筆)

しけ絲(蛙)

聲を呑む

を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴きたてる。白いしけ絲の様な雨は、水が田に満ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて来た蛙は、刈株を引返し引返し働いてゐる人々の周囲から足下から逼つて、敏捷にその手を動かせくと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと静かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇る様に、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外へ出

ると、今更の様に耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲に揺られつゝ、夜の間成長する。くぬぎや、ならや、その他の雑木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂する事を繼續しようとする。其所には、毛蟲やその他のあさましい損害が或はあるにしても、しとくと屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふ様に、力強い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

五 新生活の開幕

生方敏郎

春は氣候もいゝ景色もいゝ、郊外の道の並木に淡い緑の若葉が綻び始める頃は、何とも言ひ様のない、季節だ。しかし、それがいつまでもそのまゝ、續くよりは、やがて夏となり秋と移り冬と變つ

(一) 評論家、小説家、明治十五年初生、馬治、東京に生れた。笑上等の著がある。

William Christ

①Damascus
フランス委任
統治下のシリ
ヤ南部の都會

②Christ
William
Makepeace
Thackeray
(西紀一八一
一—一八六三
年)

③Charles
Dickens
(西紀一八一
二—一八七〇
年)



に國內に擴がりつゝ、あつたキリスト教を撲滅しようとして、その信者を捕へる目的でダマスクスへ近寄つた。その時、天に輝く光を見た。また、汝荆棘の鞭を蹴るは難し。といふ聲を聽いて、盲になつて馬から地面に轉げ落ちた。この時パウロの前には新しい生活が開けた。そして彼はキリストの使徒となつた。

イギリスの文豪サッカレは、初め當時文壇の新進流行兒デッケンスの門を叩いて、その小説に挿繪を描きたいと申し込んだが、跳ねつけられたので發憤して遂に彼自身がデッケンスに對抗すべき文豪となつた。貧弱平凡な挿繪畫家として失脚した刹那に、大文豪となるべき新生活の途が開けたのだ。

人の生活は水と同じく、停滞すれば濁りもするし、腐りもする。動

五 新生活の開幕

尾

Martin Luther

有爲轉變

①十六世紀にキ
リスト教諸國
に起つた宗教
改革運動

先達
Martin
Luther
ドイツの人
(西紀一五四
三—一五四八
年)

②Paulus
使徒の一。キ
リスト教の傳
道者。傳記未
詳

③Rome
(羅馬)

燎原の火



てこそ、始めて一年は面白いのだ。生々轉化、これが新しい生活だ。人の一生にも様々に有爲轉變があつてこそ、眞に生きがひがあるのだ。人は誰しもこの意味に於ての新しい生活を希望し、そしてその方へと向ふ。人が新しい生活を憧れ望む心の強さは、丁度朝顔の蔓が手のある方を探り求めて行くのに似てゐる。

新しい生活は求めて與へられる場合もあり、求めないで與へられる場合もある。宗教改革の大先達マルチン・ルーテルは、初め法律の研究に志したが、一日友人と共に野中の路を歩いてゐた時、驟雨に襲はれて、友人は落雷の爲に死んだが、自分は危く助かつた。その時彼の新しい生活の途が開けた。そして彼は法律を捨てて宗教に入つた。パウロはローマの役人だつたが、その頃燎原の火の様

帝國讀本新制第二版 卷五

五

いて止まず、激して反撥し、絶えず新方面を開拓して行くのでなければ、到底活々とした生活は求め得られない。喜ばしい事、それにも新生活への途は見出されよう。しかし、最も多くの場合に於て、悲哀は人を新しい運命に導くものである。

六 阿新丸 その一

さる程に、君の御企を申し勧めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まつて、先づ去年より佐渡國に流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。この事京都に聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れてをられけるが、父誅せられ給ふべき由を聞いて、今は何事にか命を

(一)第九十六代後醍醐天皇
(二)權中納言、元弘二年(一九一五年)北條氏の臣に殺された
(三)藤原氏、才學があつたが、元弘二年北條氏に害せられた
(四)藤原氏
一途
(五)正中二年(一九八五年)
(六)本間宗忠、京都府右京區花園御室眞言宗御室派の本山

冥途

惜しむべき、父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、また最期の御有様をも見奉るべし。とて母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、佐渡とやらんは人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を経る路なれば、いかにしてか下るべき。その上、汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。と泣悲しみて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀨にも身を投げて死なんと申しける間、母、いたく止めば、また目の前に憂き別れもありぬべしと思ひわびて、力なく、今まで唯一人附添ひたる中間を相添へて、遙々佐渡國へぞ下されける。

路遠けれども乗るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅思ひやるこそ哀れなれ。都を出でて十日餘りと申すに、越前の敦賀の津に著きにけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國にぞ著きにける。人してかうと言ふ

(一)今、福井縣敦賀郡敦賀町の良港、日本海岸の良

心ある人

おろそかならぬ體

べき便べんもなければ、自ら本間が館たねに至つて、中門の前にぞ立ちたりける。をりふし僧そうのありけるが立出でて、この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ。と問ひければ、阿新殿あしんどのこれは日野中納言ひのちゆうなごんの一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その最期の様をも見候はん爲に、都より遙々と尋ね下りて候。と言ひもあへず、涙をばら／＼と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、流石哀れにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂ぢぶつどうに誘ひ入れて、踏皮ふみかわはゞきぬがせ、足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿あしんどのこれを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。と言ひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なかく冥途みやうとの障ともなりぬべし。また關東への聞えもいかゞあらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔てたる所に置き



日野菊池ひのきくち資容すけのぶ朝あさ (筆齋ふでさ)

たれば、父の卿はこれを聞きて、行方も知らぬ都にかゝあらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔りし鄙ひづりの住居を思ひやつて、心苦しく思しつる涙は更に數ならずと、袂たもとの乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて

見やれば、竹の一むら茂りたる所に堀掘廻らし、塀塗つて、行通ふ人も稀なり。情なさけなの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だ幼したとひ一所に置きたりとも、何程の怖おそか

何れの怖おそか、對面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら生を隔てたる如くにて、亡なほからん後の苔の下、思おも寝に見ん夢ならでは、相見ん事も有難しと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀れなれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯

うたてし

も召され候はぬに、御行水候へ」と申せば、はや斬らるべき時になり
けりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしき事かな。我が最期の様を見ん爲
に遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よ」と
ばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今
朝までは氣色しをれて、常には涙を押し拭ひ給ひけるが、人間の事に
於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと悟つて、唯綿密の工夫の外は餘
念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、此所よ
り十町許ある河原へ出し奉り、輿かき据ゑたれば、少しも臆したる
氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き、筆をさしおき給
へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろは
猶坐せるが如し。この程常に法談などし給ひける僧來りて、葬禮
形の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新これを
一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面終にかなはずして、

頌

變れる白骨を見る事よ」と泣悲しむも理なり。

七 阿新丸 その二

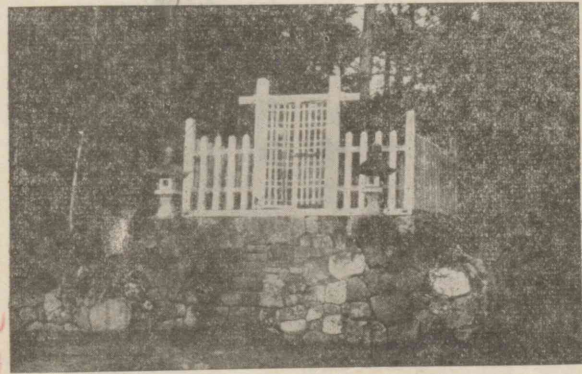
阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をば
唯一人召使ひける中間（下切）に持たせて、先づ我より先に高野山へ参り
て、奥の院とかやに納めよとて、都へ歸し上せ、我が身は勞る事ある
由にて、なほ本間が館にぞ留りける。これは本間が情なく父を今生
にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日
経ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ
出でて、本間が寢所などこまゝに窺うて、隙あらばかの入道父
子が間に一人刺殺して、腹切らんずるものをと、思ひ定めてぞ狙ひ
ける。

或夜雨風烈しく吹いて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したり

(一) 和歌山縣伊都郡紀ノ川の古義派の總本山金剛峯寺
勞る事

遠侍
キ門の
カミ

ければ、今こそ待つ所の幸ひよと思ひて、本間が寢所の方を忍びて
窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢所を變へて、いづくに
ありとも見えず、また二間なる所にともしびの影の見えけるを、これは若し本間
入道が子息にてやあるらん、それなりとも討ちて恨を散せんと、ぬけ入りてこれ
を見るに、それさへ此所にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者
ぞ、唯一人臥したりける。よしやこれも時に取つては親の敵なり、山城入道に劣る
まじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、唯人の太刀を我
が物と頼みたるに、ともしび殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚



資朝の墓

左右なく
究竟の事

き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、いかゞせ
んと案じ煩うて立ちたるに、をりふし夏なれば、ともしびの影を見
て、蛾といふ蟲のあまた明障子に取附きたるを、すはや究竟の事こ
そあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲あまた内に入
りて、やがてともしびをうち消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎
が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寢入り
たり。先づ刀を取つて腰にさし、太刀を抜いて胸元にさし當てて、寢
たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、先づ
足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の太刀に臍
の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛刺斬つて、心靜かに後の
竹原の中にぞ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆ども
驚き騒ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あ

り、さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも
出でじ。搜し出して打殺せ」とて、手にく松明を點し、木の下草の蔭
まで、残る所なくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき人手に
掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵を
ば討ちつ。今はいかにしても命を全うして、君の御用にも立ち、父の
素意をも達したらんこそ、忠臣孝子の義にてもあらんずれ。若しや
と一先づ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、幅
二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さら
ばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の
梢へさらくと登りたれば、竹の末堀の向ふに靡き伏して、やすやす
と堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗つて
こそ陸へは著かめと思ひて、たどるく浦の方へ行く程に、夜もは

素意
えんがつて
ちろへ

や次第に明放れて、忍ぶべき路もなければ、身を隠さんとして日を暮
し、麻や蓬の生茂りたる中に隠れられたれば、追手どもと思しき者ど
も、百四五十騎馳散つて、若し十二三許なる兒や通りつる」と、路に行
會ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、其
所とも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻ら
されけん、年老いたる山伏一人行會ひたり。この兒の有様を見てい
たはしくや思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候
ぞ」と問ひければ、阿新事の様をありのまゝにぞ語りける。山伏これ
を聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべし
と思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へ
ば、乗せ奉りて、越後、越中の方まで送りつけ参らすべし」と言ひて、足
たゆめばこの兒を肩に乗せ背に負うて、程なく湊にぞ行著きける。

擁護

聲を帆に上ぐ



阿新 (伊勢一寛筆)

夜明けて、便船（イサトヨ）やあると尋ねけるに、をりふし湊の内に船一艘もなかりけり。いかせん（いかにせん）と求むる所に、遙かの沖に乗りうかべたる大船順風（フセウ）になりぬと悦びて、檣を立て、とまを捲く。山伏手を舉げて、その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん（イサトヨ）と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船へ立向つて、いらたか珠（いらたかたま）敷をさらくと押揉みて、「一持秘密咒（いちもちひみつじゆ）、生々（しんじん）而加護（にがご）、奉仕修行者（ぶじしゆぎやうじや）、猶如（なほごと）薄伽梵（はくかはん）』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船此方へ漕返してたばせ給

肝膽を碎く

(一)越後の國府、今の新潟縣中頸城郡直江津町の近くにあつた。鰐の口の死

へ」と、跳り上り跳り上り、肝膽（かんたん）を碎いてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に悪風吹來つて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてて、山伏の御坊先づ我等を御助け候へ」と、手を合せ膝を屈め、手にく船を漕戻す。汀近くなれば、船頭船より飛下りて、兒を肩に乗せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入りたれば、風はまた元の如くになほりて、船は湊を出でにけり。

その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、あの船とまれ」と招けども、船人これを見ぬ由にて、順風に帆を上げたれば、船はその日の暮程に、越後の府にぞ著きにける。阿新山伏に助けられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、いちじるしかりけるしるしなり。

——太平記——

ク ヒ ム リ オ

(一)後醍醐天皇
卿相雲客

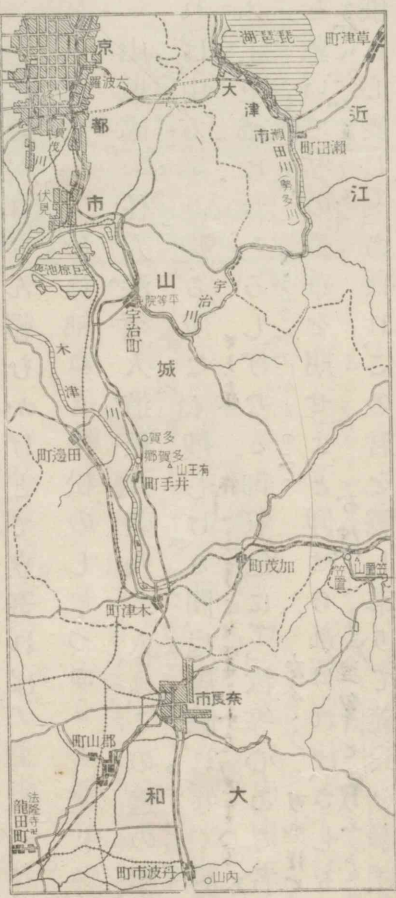
とき(関)
(二)藤原藤房
(三)藤原季房
藤原の弟
十善の天子
田夫野人

八 松の下露

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかかりければ、主上を始め参らせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町が程こそ、主上を扶け参らせて、前後に御供をも申されたりけれ、風雨烈しく路暗うして、敵のときの聲此所彼所に聞えければ、次第に別れくになりて、後には唯藤房、季房二人より外は、主上の御手を引き参らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、其所とも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜のうちに赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ちどまり、晝は路の傍なる青塚の

ク ヒ ム リ オ

(一)京都府(山城)
國綴喜郡多
賀村と同郡井
出町との境



蔭に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜

は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへずとかくして

夜晝三日に、山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけ

り。藤房も、季房も、三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に遭ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ梢

を拂ふ松の風を、雨の降るかと思し召して、木の蔭に立寄らせ給ひたるに、下露のはらりと御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、さして行く笠置の山を出でしより

あめがしたにはかくれがもなし

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん頼むかげとて立寄れば

なほ袖ぬらす松のしたつゆ

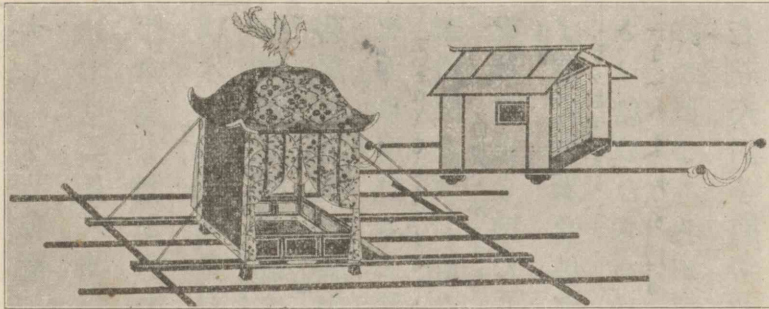
山城國の住人深須入道松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峯々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよと仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ、この君を隠し奉りて義兵を擧げばやと思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事のもれ易

榮華 御氣色

榮華

もだしけるこ
そうたてけれ

(一)今奈良縣山邊郡和村大字
杣ノ内の稱
(二)殷の湯王が夏
の榮王に夏臺
といふ牢獄に
投ぜられた事
を指す
(三)句踐
(四)今の支那浙江
省紹興縣にあ
る山



くして道の成り難からん事をはかつて、もだてへんことをしけるこそうたてけれ。俄の事にて網代の輿張だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乗せ参らせて、先づ南都の内山に入れ奉る。その體唯殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降せし昔の夢に異ならず、これを聞きこれを見る人毎に袖をぬらすさといふ事なかりけり。この時此所彼所にて生捕られ給ひける人、人都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは數ふるに違あらず、或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都に入り給ひければ、その方さまかと覺ゆる男女街に立ちならびて、人目をも憚らず泣悲しむ。あさ

天上の五衰
人間の炊

(一) 詩人、第二高等學校名譽教授、名は林吉、明治四年仙臺市に生れた。詩集に「天地有情、曉鐘等がある。」

ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の炊唯夢かとのみぞ覺ゆる。——太平記——

九 希 望 蘆花の詩、見女黄果一炊の 土井 晚 翠

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆる時、
夕月波にしづむ時、
黑暗よもを襲ふ時、
空のあなたに我が舟を
導く星の光あり。

ながき我が世の夢さめて
むくろの土にかへる時、
心のなやみをはる時、
罪のほだしの解くる時、
墓のあなたに我が魂を
導く神の御聲あり。

なげきわづらひくるしみの
海にいのちの舟うけて、
夢にも泣くか塵の子よ、
浮世の波の仇さわぎ、
雨風いかにあらぶとも、
忍べとこよの花にほふ。

仇さわぎ

啓示

港入江の春告げて、
 流る、川に言葉あり。
 燃ゆる焰に思想あり。
 空行く雲に啓示あり。
 夜半のあらしに諫誠あり。
 人の心に希望あり。

— 天地有情 —

(一) 評論家、文學博士、山形縣人。明治三十五年歿。瀧口入道、況わが後録の著者。牛乳集めてある。

一〇 日蓮上人

高山林次郎

この世の中で眞に偉大な事業といふのは、何も戦争に勝つたり、國を取つたりする事のみではない。少年の心には、とかく頼朝や豊太閤の様に、天下を取つたり、外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、さ程尊ぶに

属ホッ

覇ハ權ケン

陳チン蔡サイ

畢ヒ竟キヤウ

眩クワン

(1) Alexander the Great. (歴山大帝) ケドニアの有名な王。(西紀前三三三—三二三年) 覇權

(2) Aristotle. (有名なギリシヤの哲學者) (西紀前三八四—三二二年) (3) 共に支那春秋の世の列國の一。

快哉を叫ぶ

足らぬ事の様には思はれるであらうが、これは大いなる誤である。敵を征服し城を屠る事も難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までもその勢力を有する事は、人間の事業としては更に大きく、また更に尊むべき事ではあるまいか。アレキサンダー大帝の遺業も、ローマ帝國の覇權も、その時々々の榮落に過ぎずして、今日に於ては何の跡形もないが、アリストートルの學術や、キリストの教は、今日もなほ昔の如く人の心を支配し感化してゐる。春秋戰國の王霸の争も、支那の歴史に空しい文字を留めたばかりであるが、その當時に、陳蔡の野に飢ゑた孔子の教は、今もなほ東洋文明の根據となつてゐる。世にはゆる英雄豪傑の事業は、壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしめる外に、多く後世に影響を與へるものではない。これを喩へるならば、丁度仕掛花火の、一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばしめるが、間もなく消え去つて、

William Shakespeare
イギリスの劇作家、
西紀一六四一—一六六〇年

情操



小湊の誕生寺

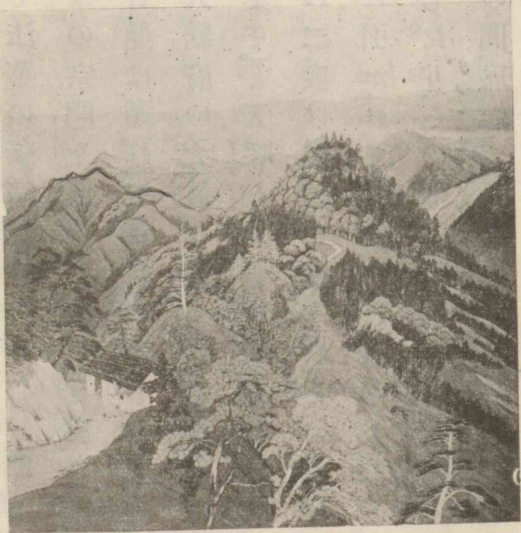
もとの暗黒に立返る様なものだ。これを文藝や宗教の勢力の深大で且永久なのに比べれば、事業の價值何れが大であるか、おのづから明らかであらうと思ふ。さればイギリスの哲人カーライルは、イギリスが一人のシェークスピアを有する事は、印度帝國を有するよりも尊いと言つた。
また人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、その思想が高尙で品性尊く、且意力情操の絶大純潔な人を言ふのである。そのいはゆる英雄豪傑と呼ばれる人の中には、その表面の仕事こそ人並以上に大きい、その品性のこれに伴なつて高潔なのは極めて乏しい。つまり彼等の多くは、境遇の幸ひであつ

龍兒

東家西家

時勢の寵兒

たが爲に、己眞にこれに當るべき才器品性がなくして、偶然に大事を成遂げたのである。例へば、高山の上に吹上げられた種子が其所に成長して、亭々として天際に聳える様なものである。若し禪一貫の赤裸にして突出したならば、東家西家の權兵衛、八兵衛（近所の権兵衛、八兵衛）同様の人間でない者が幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは、いはゆる時勢の寵兒（時勢の寵兒）であつたからである。



清澄山・田義雄筆

日蓮上人はその人物に於ても、その事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。先づその事蹟から考へてみても、安房の一漁師の子に生れ、幼より出家し

叡山

(一)千葉縣安房郡天津町の北、山上に清澄寺がある。

罵詈

罵詈

大霸府

(二)日蓮の四箇の格言、念佛無間、禪天魔、眞言七國、律國賊。

刀杖瓦石

(三)神奈川縣鎌倉郡川口村龍口寺の地、刀杖瓦石の災難。

生疵

慘酷

て清澄山に上り、後、叡山に學び十二年の遊學の後、當時に行はれた佛教諸宗門の、何れも教祖なる釋迦の眞意に違へるものである事を悟り、その故山に歸つて始めて法華の新宗門を開いたが、聞く者皆狂として取合はず、却つて在來の宗門を罵詈したのを怒つて、彼を殺さうとした者さへあつた。日蓮は遁れて鎌倉に至り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝあるこの大霸府の大道に立つて、念佛者は無間地獄に墮つべし、禪は天魔の業ぞと大呼したので、執權北條氏の怒に觸れて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、その間、暴民の爲に庵室を焼かれたり、龍口に引かれて首斬られ様としたり、敵人に要撃されて命を落さうとしたり、その他、刀杖瓦石の災難、その數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖るに違なく、生疵の身に絶える間は殆どなかつたとの事である。
日蓮の受けた迫害は、實に慘酷極つたものであつた。そしてその

軀 泰然

生死の間に出入する

呼號する
(一)淨土宗の開祖源空のこと、建曆二年(一八七二年)寂、年八十。
(二)眞宗の開祖で本願寺の開基、弘長二年(一八九二年)寂、年九十。



辻説法 (田野九浦筆)

時間も一年ならず、二年ならず、三、五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。彼は長い二十二年の間、絶えず自己の信じた眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなかつた。常にこの臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり。と言ひ、たとひ日本國の位を以て誘ふとも、父母の頸を斬らんと脅すとも、我は決してこの眞理をば棄てじ。その外の大難は風の前の塵なるべし。と宣言して、天下何恐る、所なく、憚る所なく、聲の根の枯れない限り、筆の毛の續く限り、正々堂々と天下に呼號した。法然や親

一〇 日蓮上人

折伏 孤立 朝家權門

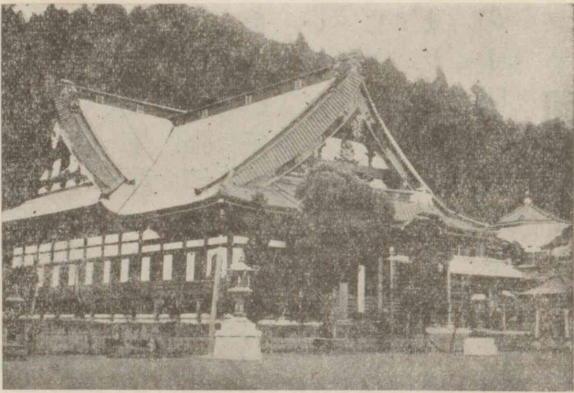
朝家權門 介然孤立 法鼓

朝達勢カ家 驚の様に朝家權門の知己があるではなく、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧侶を敵として、折伏の法鼓を鳴し、時の執權たる北條氏を逆賊と呼びは、僅かの小島の主と卑しんだその態度の雄々しさ、勇らしさは、實に我が國の歴史に類例のない事であつた。古人の語に、「一義を執つて十年を踰ゆる者は必ず眞面目なり」といふ事がある。日蓮は二十二年の長い月日の間、常に生死の間に出入しながら、その眞理と信奉せる法華經を説いた。これ程の眞面目がまたと世にあるであらうか。されば天も人も次第にこの至誠の聲に靡いて、その教は漸く都鄙に擴がり、淨土、禪宗の僧侶どもも追々と改宗して、念佛の代りに唱題の響がだん／＼と高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、この宗門の勢は益々盛大となり、戰國時代にあつては、天下の寺院のうちで、法華その半ばを占めたとの事。今日では眞宗の全盛に壓倒されたが、それでもなほ日

一人

痛言する 辛辣激越

(一)身延山、甲府市の西南五〇キロメートル、高さ一四八メートル



本國の大宗門たるを失はぬ、これ皆日蓮の遺業の餘澤である。

それ日蓮の人物はどうであるかと
言ふと、決して世人の多く信ずる様な強
情我慢一方の人ではない。七大寺の寺塔
を焼拂ひて、彼等の頸を由比ヶ濱に斬らず
ば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言したあ
たりは、實に辛辣激越の極みではあるが、
その裏面に温潤玉の如き愛情が、春の泉
堂の様に溢れて居つた。夫婦の愛情に對し
ても、常に深厚な同情を寄せ、孝順の情に
至つては、實に後人を感動せしめるに足
る美蹟を遺した。即ち六十近い老境に至りながら、なほ父母を懷慕
するの情に堪へず、身延の山に引籠つてからも、毎日五十餘町もあ

小説家、本名明野尻清彦、明治三十年生、濱市に由り、赤穂浪士、井正雪、等々の著がある。

碩學

俠骨

る險山を攀登つて、遙かに生國房州の空を拜んだといふ事は、實に孝行の鑑と言ふべきではないか。これが一月、二月の事ではない、雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたといふに至つては、眞に驚歎の外はないではないか。かういふ慈悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬ事を自白するに等しい。これを要するに、上人は知識に於ては、當時のいかなる碩學にも匹敵し得べき深大な素養を有し、またその威力に於ては、生死を顧ずして信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、またその感情に於ては、温潤閑雅、いはゆる大丈夫の俠骨は、婦女子の柔腸を妨げざる底の人情をもつたのである。

自修文

日期と日蓮

大佛次郎

日蓮の高弟、新羅三郎の裔、上總の人、元應七年(一一九三)武蔵國池上で寂した。七十九歳。弘長元年(一一二一年)五月十二日、蓮がいつもの様法を講じて、説法を執り、下の時、侍を捕へて引立、てて行つたとの知らせ。信徒、その宗教を奉ずる者、信者、鎌倉から逗子へ通ずる路、鎌倉の市街を西南へ流れて、海に比ヶ濱で注ぐ。

日期は走り出してゐた。知らせが草庵に届いた時、箒を持つて庭におりてゐたのである。山際の路を取亂した様子で駈上つて來た信徒の一人が話す事を聞くと、蹠のまゝ、走り出したのであつた。

人が怪しんで振返つて見た。日期は蒼ざめてゐる。汗が若い額を光らせてゐる。名越の通から裏道を抜ける。すぐに滑川の流れてゐる洲へ出る。海の一部がどんよりした色で、梅雨晴の空の下に浮上つて來る。濱全體が眺められる砂丘の頂へ出るまでは、まるで夢中であつた。曇つてゐるが、明るくざら／＼した長い汀の一箇所に、眞黒に人だかりがしてゐた。日期は息もつがず駈下りて行つて、滑川の淺瀬を渡つた。

「お師匠さま、く。遠くからかう叫んで行つた。人が皆振返つて見た。その中から日期の名を呼んで出て來たのは信徒の者だつ

おろく／＼して泣聲を出して物がついた様にものけがのり移つた様に邪鬼はものけ

土色 血色がなくなつて蒼黒くなつた顔色をい

た。

「落著くのだ。」

「もうだめだ。上人は伊豆に流されるのだ。お上のする事で、我々の力では何とも出来ない。」

おろく／＼してかう言ふ聲も、日朗の耳には入らなかつた。日朗は何か物がついた様に荒々しい目の色をして、人を分けて突進んで行つた。水際へ出ると、船頭が棹を突いて丁度出かゝつてゐる船の上に、日蓮の姿が見えた。

「お師匠さま。」

日蓮は顔を舉げた。日朗はざぶ／＼水の中にはいつて行つて、船頭が何か怒鳴るのも肯かず、舷へ手を掛けてゐた。

「のけ、邪魔になるのけ。役人が立つて来て、怖い顔で睨みつけた。その後から日蓮が立上つて、何か言ひながら出て来た。日朗は泣いてゐるのだつた。土色になつた頬に涙が流れるだけで、思ふ

事は何も言へなかつた。その哀れに興奮した様子を見た時、日蓮の胸にも、何かしら悲しいものが涌いて来た。日蓮も涙ぐみながら強い聲で言つた、

「日朗。」

「よく来てくれたな。何でも無いぞ、何の事もないぞ。」

「いつもわしが話したな、かうなる、こんな事になる。末法にこの經を弘むれば、杖木に打たれ流罪に行はれようと。それだ。それだけの事だ。そちの覺悟の上の事ではないか。わしがかう成つたといふのは、やがてわしが勝つといふ事だ。よいではないか。待つてをれ。よく留守をしてな。」

「お師匠さま——」。

荒々しく役人が分入つて、日朗が必死に舷をつかんでゐる手

末法 佛法がよく行はれない末の世。杖木 人をむちうつ

一途 ひとすぢ ひ
たすら。

邪険 じけん 無
意地悪く。無
慈悲に。
たわいもなく
張合もなく。
手こたへもな
く。

啞然 おぼろ
驚きあきれて
口もきかえぬ
様。

を放させようとした。こちらはさうはさせまいと、なほもすがり
つくのだった。

「連れて行つて下さい。お願いします。師の坊のお供をさせて下さい。」
「放せ。」

「いゝえ、蒼ざめてゐるが、一途の覺悟を籠めた目附である。」
「お願いします。」

日蓮がこれを見て何か言はうとする前に、役人の一人が舟板
を拾つて、邪険に日朗の腕を拂つた。日朗はたわいもなく水の中
に轉んだ。

「何をするつ。」

雷の様に叫んで日蓮は、その男を睨みつけた。抑へきれない憤
怒が満面に燃えてゐた。突然の事だったし、護送する役人の立場
として、こんな事は期待もしなかつたのと、餘りに日蓮の劍幕が
烈しかつたのとで、男はばかになつた様に啞然として、持つてゐ

やをら
靜かに。

(一)今の静岡縣
伊豆國田方
郡伊東町地方

霞む
はつきり見え
ない。

た舟板を落してゐた。

「子供だぞ。」日蓮は更に強くかう叱咤して、やをら日朗の方を見
た。

「日朗……」

船は離れてゐた。日朗は腰までの水の中に立つて、なほ後を追
はうとして、もがいてゐるのだった。

「心配はいらぬのだ。……待つてをれ。」伊東と鎌倉では、西と東ぢ
や。朝日が東に登つたら日朗が鎌倉にをるなとわしは思はう。
そちも月が西に沈んだら、わしが伊東にゐる事を考へてくれ。」
「お師匠さま。」

日朗は身を慄はしてかう叫んだ。止めどもなく涙が流れて、目
が霞んでゐた。しかし、船の上の日蓮がいつもの様に、日朗を勵ま
す様に笑つて立つてゐるのが見えた。

船は青い影を伸び縮みさせて、だん／＼沖へ出てゐた。日蓮の

悲しさがこみ上げて来る。せきとめられ、つて来た。の情がわき起

生身のまゝ生きてゐる身體をそのまゝ

(一)上下二巻、昭和六年東京先道社發行

姿もそれと分るだけで、顔はもう見えなくなつてゐた。今更の様に悲しさがこみ上げて来て、兩手で顔を蔽つた。その手はさつき舟板で打たれた所が、燃える様に熱かつた。お師匠さまがゐなくなるのだ。唯の師弟の関係だけには考へられない、もつとく、深い魂の底から揺上げて来るものがあつた。生身のまゝ、引裂かれるのも同じ苦痛であつた。沖まで出た船は、漂ひながら帆を揚げにかゝつてゐる。やがてその帆は、雲を漏れる鈍い光の中に揚つて、白く光つた。船は急に速力を早めて走り出した。朝日が東に登つたら……日朗は日蓮の言葉を思ひ出した。一度に悲しみのこみ上げて来るのを感じた。朝日が東に登つたら……心にかう繰返して、男泣きに泣くのだつた。

(一)日蓮

一一 信濃路の旅

正岡子規

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳えくゝて天も高からず。樵夫の唄、足下に起つて、見おろせば、つた、かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山おのづから震動す。遙かに來し方を見返るに、山また山、峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人と言へるは、彼かとはかり疑はれて、つゞら折いく重の峯をわたり來て、雲間にひくき山もとの里

日もや、暮れかゝれば四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず、駈上る駒の蹄に踏散す雲霧のあはひを見れば、一步の外は削り立てたる峻崖の底も幽かにいて、いと怖し。登れども登れども窮る

一一 信濃路の旅

三

あはひ

(一)俳人、歌人。名は常規。愛媛縣の常規。明治三十五年、病没。俳諧大要、六尺、屋俳話、俳句あり。著書、子規全集に収められてゐる。(二)群馬縣碓氷郡寸馬豆人(馬豆)

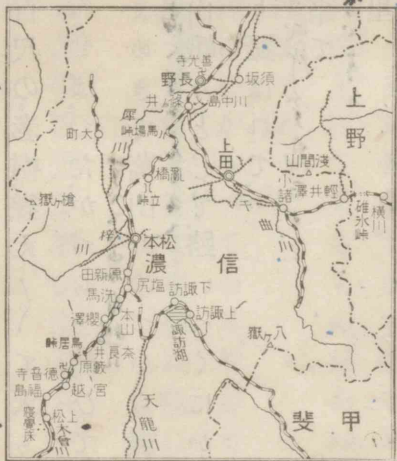
ほととぎす
ホトトギス
時鳥
杜鵑
不知歸
子規
郭公
杜宇
蜀魂

(一)長野市の北部
天宮寺の古刹
第三十五代皇
の創建と傳へ
るの極

萌葱

疾

所を知らず山益高く、雲愈低し。
見あぐれば信濃につゞく若葉かな
輕井澤は流石に夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに一重の旅衣
見果てぬ夢を護るに難かり例ならず
疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺
屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、
その色、染めたらんよりも麗し。
山々は萌葱淺葱や時鳥
淺間は雲に隠れて、煙もいづこに立
迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光
寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戦場はいづくの程とも知らね
ど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん。河の水は
いたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。



小林

(一)長野縣更級郡
猿ヶ馬場峠と
いふ

一樹の蔭一河
の流



木曾行脚の中子の規

日はくれぬ雨はふり來ぬ旅衣
たもとかたしきいづくにか寝ん
次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行
手遙かに山重なれり。野の狭う尖り
て、次第々々に入る山路険しく、弱足
に登る馬場峠、さても苦しやと休む
足下に、誰が栽るしか珊瑚なす覆盆
子、旅人も採らねばや、こぼるゝばか
りなり。少し登りて、とある樹蔭の葦
簾茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を五六町の麓に汲みて
もて來る汗の滴り情を汲む一口に浮世の陽は洗はれたり。一樹の
蔭、一河の流とや、聖の教も時にあうてこそ有難けれ。
この夜は亂橋といふ怪しの小村に足を留む。隣室の雑談に夢覺



山林

されてつとめて此所を立出づれば、はや爪先上りの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとの勧め。有難や乗りてみれば、旅程氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし路のあたり（一）に咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつぎと申す」と言ふ。いと嬉しくて、

むら消えし山の白雪来て見れば

駒のあがきにゆらぐ卵の花

峠にて馬をおる。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おるせば早苗取

松本にて晝餉した、む早く木曾路に入らん事のみ急がれて原新田まで三里の道を馬車に縮めて洗馬までたどり著き、饅頭にすき腹を肥して、本山の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤を過ぐれば、此所ぞ木曾の山入。山の景色、水の有

(一) 東筑摩郡。松本市の南方。
(二) 原新田の南約八キロメートル。
(三) 洗馬の南約四キロメートル。
(四) 西筑摩郡。本山の南約四キロメートル。

現をぬかす
桃源

(一) 櫻澤の南約八キロメートル。

(二) 奈良井の南約二キロメートル。

(三) 西筑摩郡。木祖村。葦原。
(四) 西筑摩郡。北境の山中から出た。尾張。美濃。通つて伊勢海に注いでゐる。

様、はや尋常ならぬけはひに現をぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井の茶屋に憩ひて、ぐみはなきか」と問へば、ぐみといふ物は知り侍らず。珊瑚實ならば背戸にあり」と言ふ。山中に珊瑚さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峡中第一の難所と言ふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀登る。

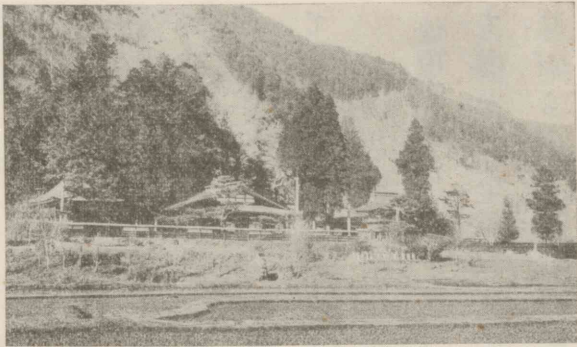
馬の背や風吹きこぼすしひの花

頂にて馬をおり、つくづく四方を見おるせば、古木鬱蒼谷深くして、樵夫の小徑微かに隠見す。珍しく晴渡りたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、葦原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほよりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈迫りて、かぶせか、らん勢怖しく、奥山の雪を解して清らかなる

(一) 敷原の南方約八キロメートル

(二) 壽永年間(一八四五年)の建立
(三) 木曾義仲

(四) 宮越城址、木曾義仲の本城、一名山吹城
(五) 「夏草やつはものどもが夢の跡」(奥の細道、芭蕉)



そゞろに古へをしる言葉の端、この翁、謠ならばかき消す様に失

(所廟の仲義左 樓鐘兼門山右 堂本央中) 寺音 德

るもをかき、宮越の村外れに佇む程に、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて、慇懃に德音寺への路を問ふ。翁の言ふ、さても優しの若者や、旭將軍のなき跡を弔はんとてや此所までは來給へる。此所に茂れる夏木立は八幡の御社なり。彼所の山の上こそ昔の城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどももの住みし夢の名残なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる」と、一つくくに指さす。

(一) 德音院殿、義山宣公の略、義仲の法名
(二) 西筑摩郡、福島町

(三) 福島と上松との間

せぬべし。日照山、德音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや、福島を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、
をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行きくくして、棧(せき)に著きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたる様、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむし重なりたる苔の、美しう青み渡れるあはひくくに、何げなく咲出でたる杜鵑(つばき)花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水嵩増したる川の勢渦(せうま)まく波(なみ)に雲を流して、突(つ)きては割れ、當りては碎くる響、大磐石(おおいわ)も動く心地して、後

命をからむつたかづらの句碑

長野縣西筑摩郡上松町

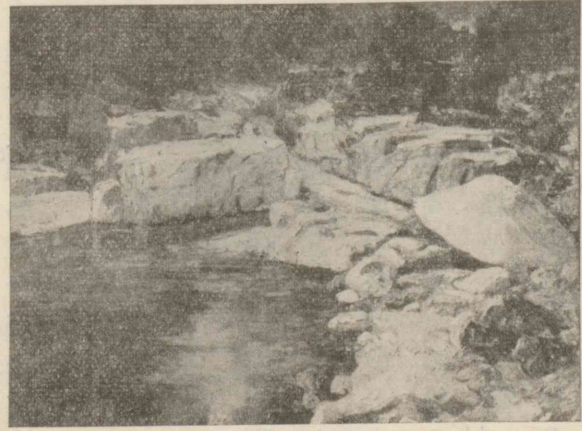
の茶屋に入り、床几に腰うち掛けて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしは止まず。芭蕉の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るは、我が身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひやくくと覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見渡せば、此所ぞ棧の跡と思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩もなく、唯つた、かづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古への面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて

わたしそめけん木曾の棧

上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里

なり。寺に至りて、案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの



(筆 博 田 吉) 床 の 覺 寢

上を指さして、此所は浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川の直中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩と言ふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、姐岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり」といふと殊勝氣にぞしやべりける。

—— 瀨祭書屋俳話 ——

一二 人と自然

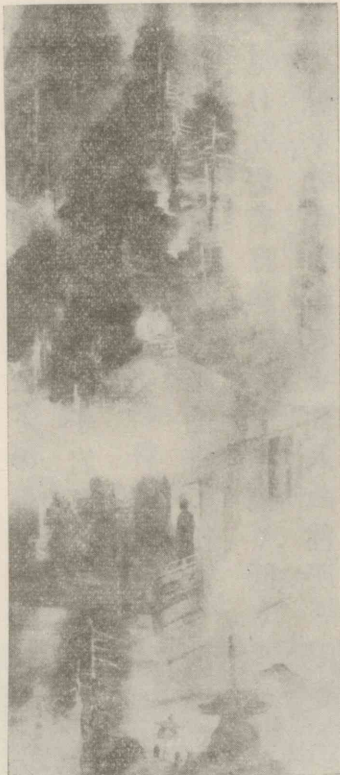
吉田 絃二 郎

私は旅行をする度に、曾て芭蕉といふ一人の俳人が日本に生れ

小説家、明治十九年佐賀縣に生れた。草光る。島に秋紀行等の著書あり、吉田絃二郎全集に収められてゐる。

てゐた事を有難く思ふ。日本の自然は確かに優れた自然であるに違ない。しかし、一俳人芭蕉が曾て日本の自然を歩み、自然を歌つたといふ事だけで、日本の自然そのものが、どれ程磨きをかけられたか知れない。

(一) 若手縣西磐井郡平泉村。
(二) 金色堂ともいふ。天治元年(一七八四年)陸奥藤原氏の建立。



光堂(葛谷龍岬筆)

(三) 源を山形縣の南部山中に發して、酒田、北流し、海に注ぐ。日本流を以て聞え

出す事によつて、どれ程平泉そのものの印象を深くさせられるか知れない。
更に最上川に於ける

(一) 山形縣にある。高さ一九二四メートル。

(二) 秋田縣由利郡望城村にあり、つたが、水であり、四年(二四六)陸爲に水濁れた。陸地となつた。

(三) 奥州行脚中の旅行日記。

五月雨をあつめて早し最上川

月山に於ける

雲の峯いくつ崩れて月の山

象潟に於ける

きさかたや雨に西施がねぶの花

の如き、東北より北國へかけての奥の細道の句を案ずる時、私はどれ程奥の自然が芭蕉の詩によつて豊かにされたかといふ事を、感じないではをられない。

更に

荒海や佐渡に横たふ天の河

の一句によつて、北國の秋の夜の哀れさの言盡されたのを知る。自然は偉大である。けれども、唯一人の眞の詩人の力もまた偉大である。偉大な自然をして更に偉大ならしめるものは、眞の偉人の

(一) 鹿兒島灣。

言葉である。
芭蕉は一度は薩摩瀉の月を見たいと思つてゐた事もあつた様である。しかし、彼は終に日本の南を見ずして、大阪の客舎で死んだ。彼の足跡を刻み附けた北國の山河は恵まれてある。彼を迎へる機會を持たなかつた南方の山川は不仕合



白隱和尚
白隱和尚

東海道線沼津驛の稍西に駿河の原の宿がある。富士の尊い姿が麥畑を越えて雲の上に聳えてゐる。曾て其所に聖僧白隱が住んでゐた。農家の流しもとに捨てられた残飯や腐つた醬油を乞うて、僅かに貧しい一生を送つた白隱を思ひ出しつゝ、旅人は富士を眺めるであらう。白隱は忌はしうはさを立てられても、決して否定はしなかつた。怒りもしなかつた。その真相が明らかにな

(二) 静岡縣、駿河國、沼津市。
(三) 同縣(駿河國)駿東郡原町。
(四) 江戸時代の臨濟宗の名僧、駿河の人、明和五年(一八四八年)寂、年八十四。

れた時も、彼は喜びもしなかつた。聖僧と呼ばれる事も、破戒僧と罵られる事も、彼に取つては齊しく草原を吹く風に過ぎなかつた。彼は靜かに生き、靜かに死んだ。しかし、曾て其所に一人の乞食僧白隱和尚が生きてゐたといふ事を思ふだけでも、駿河の山は尊く、駿河の麥畑は輝く。

(一) 蘆の湖の水は美しい。しかし、曾て其所に働いた一人の人間の魂は更に美しい。蘆の湖の畔に立つ時、私たちは山を穿つて蘆の湖の水を駿河の方へ引いたといふ一人の男の業績に就いて考へざるを得ない。

日本の到る所に私たちは、名もない小英雄たちが山を割き、海を埋め、土堤を築いて人々の爲に盡した尊い物語を聽く事が出来る。それ等の物語によつて、日本の自然はどれ程美しく尊くされてゐるか知れない。

(一) 箱根山にある火口原湖。

湖に映る白雲は美しい。しかし、曾て其所に映された人間の魂の尊い動きは更に美しい。

藝術は滅びるであらう。日本の到る所に散在する英雄たちの塚も滅びるであらう。唯しかし、曾て其所に動いた詩人や小英雄たちの魂の物語だけは、永劫に人生の尊さに就いて、人生の有難さに就いて、人類を勇氣附けてくれるであらう。

私は旅を續けてゐる間に、幾度かふと草の中に埋れつゝある由ありげな輪塔や碑を見出す事がある。恐らくそれ等の塚に就いては、曾て傳へられてゐた物語さへも忘れられてしまつた事であらう。

しかし私たちは、曾て其所に人類が住み、人類が悩み、人類が生きつゝあつたといふ事を思ふだけでも勇氣附けられる。其所には幾多のあさましい人間の心も動いてゐたであらう。しかしながらそ

れと同時に、幾多の小英雄たちが、その周囲の人々の爲に山を穿ち、水を引き、詩を歌つた事であらう。

風が吹く。草が輝く。

私は自然の美しさに酔ふ。

更に曾て其所に生き、悩み、苦しんだであらう小英雄たちを思ふ

時、私は神の前に跪く。

—わが詩わが旅—

一三 東西の自然詩觀

本間久雄

吾々日本人と西洋人とでは、自然に對する觀方が著しく異なつてゐる。この事は、彼我の文學や藝術を比較鑑賞する者の容易に首肯し得る所である。

先づ吾々日本人は、自然といふものに對して、著しく親愛の感情をもつて居り、また自然の美に對して敏感である。西洋人は、この點

(一) 英文學者、早稲田大學教授、米澤治十郎、市生、活文學、滯歐文學、著者がある

Nature.

Human nature.

Jean Jacques Rousseau.

フランスの思想家、(西紀一七

七八年)

に於て遙かに劣つてゐるらしい。その證據には、例へば英語で「ネーチュア」といふ言葉は、少くとも十八世紀の終頃までは、今日用ひてゐる外界の自然といふ意味ではなくて、人間の性情(モラル)といふ意味であつた事に徴しても分る。十八世紀の後半に哲人ルソー(二)が、その當時の文明に反抗して、例の有名な「自然に還れ」といふ事を唱へたが、この場合の自然もまた、人間の本性といふ意味で、言葉を換へて言ふと、徒に人爲的な文明の虚偽と虚飾とを一切捨去つて、赤裸々な、純眞無垢な人間の本性に立返れといふ意味であつたのである。蓋しこの事實は、「自然」といふ言葉が、西洋に於ていか様に用ひられてゐたかといふ事を示してゐると共に、また自然そのものが、いかに鑑賞の對象として重んぜられてゐなかつたかを語るものである。

事實また繪畫などに就いて見ても、自然そのものを取扱つたいはゆる風景畫といふものの重んぜられたのは、極めて近代の事であつて、少くとも十七世紀以前には、天然の風景そのものを主題とした繪畫は殆どなかつたと言つてよい。無論、風景を描いたものも無いではないが、それは唯人物畫の背景としてに過ぎなかつた。自然そのものの美を感じ、それをそれ自らとして繪畫の題材としたものではなかつたのである。

またいはゆる造庭術などいふものに就いて見ても、自然に對する彼我の態度の相違がよく分る。西洋では、庭は客間の延長に過ぎない。随つて庭の芝生は普通に「緑の毛氈」と呼ばれてゐる。客間に毛氈を敷く様に、庭に緑の毛氈即ち芝生をこしらへるのである。であるから、樹木の配置でも、石の配置でも、すべてそれは客間に椅子や卓子や、その他の家具類を配置すると同じ氣持で造られたものである。これに反して日本の庭は、出来るだけ人工を加へない自然のままの面影を取入れようとしてゐる。即ち石の置き方でも、樹木の

あつて、少くとも十七世紀以前には、天然の風景そのものを主題とした繪畫は殆どなかつたと言つてよい。無論、風景を描いたものも無いではないが、それは唯人物畫の背景としてに過ぎなかつた。自然そのものの美を感じ、それをそれ自らとして繪畫の題材としたものではなかつたのである。

またいはゆる造庭術などいふものに就いて見ても、自然に對する彼我の態度の相違がよく分る。西洋では、庭は客間の延長に過ぎない。随つて庭の芝生は普通に「緑の毛氈」と呼ばれてゐる。客間に毛氈を敷く様に、庭に緑の毛氈即ち芝生をこしらへるのである。であるから、樹木の配置でも、石の配置でも、すべてそれは客間に椅子や卓子や、その他の家具類を配置すると同じ氣持で造られたものである。これに反して日本の庭は、出来るだけ人工を加へない自然のままの面影を取入れようとしてゐる。即ち石の置き方でも、樹木の

植ゑ方でも、水の流でも、出来るだけ深山幽谷の趣を傳へようとしてゐる。自然に對する態度のいかに異なつてゐるかは、容易に領かれるではないか。

また同じく、自然を描いた詩歌を取出してみても、西洋のは自然を描く事によつて、同時に作者がその懷抱してゐる思想感情を吐露したといふのが多い。言葉を換へて言ふと、詩人が自己の人生觀なり、宇宙觀なりを専ら表白する爲に、自然を借りて來たのである。例へば、イギリスの詩人ゼームス・トムソンの有名な「四季の歌」が、春夏秋冬の移り變りを描きながら、其所に人生の榮枯盛衰の果無さを暗示したり、同じくイギリスの詩人ウィリアム・ウォーズワースが、自然の美を讚へながら、其所に麗しい人間の世の相を冥想し、併せて神の恩寵の遍く充ち溢れてゐるのを感じるといふ如きである。日本にもこれに類した自然詩人のある事は言ふまでもない。^(三)しぎ立

James Thomson (西紀一七〇〇—一七四八年)
William Wordsworth (西紀一七七〇—一八五〇年)
^(三)「心なき身にあらはれしき立つ澤の秋の夕ぐれ」(山家集、西行)

つ澤の秋の哀れに人生の無常を觀じた西行、夏草の所得顔に生ひ繁つてゐるのを眺めて、兵どもの夢の跡を弔つた芭蕉の如き、その代表であるが、日本には更に、自然の風光をそれ自らとして、何等の主觀をも加へずに詠じてゐる多くの詩歌のある事を忘れてはならない。即ち古い所では人麻呂の

天の海雲の浪立ち月の船

ほしの林に漕ぎかくる見ゆ

の如きから、近世では蕪村の

菜の花や月は東に日は西に

の様、自然の美しい相を、純粹な客觀的な立場から、全くそれ自らとして、詩歌の對象としてゐるものが甚だ多いのである。蓋し、かくの如きは、外國の詩歌には比較的少い所で、明らかに日本の詩歌の一つの特徴と見てよいのである。と同時に、この一事は、偶、以て吾々

日本人が自然美そのものに對して、いかに外國人よりもより一層敏感であり、それを鑑賞する能力に於て、より一層優れてゐるかといふ事、一言で言へば、自然そのものに、彼等よりもいかにより一層深い親愛を感じてゐるかといふ事を證するものに外ならないのである。

さて、それならば、どうして吾々日本人がさうであるかと言ふに、その一つは、日本人の國民性の中に、自然愛好の一念の特に際立つて強いものがあるといふ事に歸しなければならぬが、更に遡つて、どうしてさういふ國民性が形作られたかと言ふ事になると、その一つの原因は、明らかに日本の自然そのものが特に豊潤であり、風光そのものが特に明媚であるといふ事にあるのである。と言ふのは、もとく、國民性は、風土の關係によつて影響される事の極めて多いものだからである。この意味から言ふと、日本の自然と外國

豊潤

の自然とは、それく、それにふさはしい自然鑑賞の態度を、彼我國民の間に形成したとも言ひ得るであらうが、それはとにかく、自然に對する親愛の感情の特に強い事は、確かに吾々日本人の誇つてよい特徴の一つである。

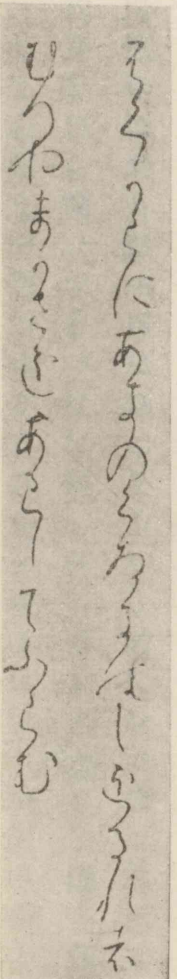
—東遊記—

一四 清水

春すぎて夏きたるらし白たへの

ころもほしたり天の香具山

持統天皇



蹟筆之貫紀傳

○慶九年(一六六六年)致天
不安時代の歌
人古今集撰
者一人天
ふくからに
あきのくさ
きはむへや
まかせを
むらしてふら

一四 清水

三

(一)平安時代の武
將歌人。治承
四年(一一八四
年)平家なる
敗死した。年
七十七。

夏日
波乃原豊榮
登朝日子能
御影恐支六
月酒空
眞淵

なつの夜はふすかとすれば杜鵑
鳴く一聲にあくるしのゝめ

源頼政

庭の面はまだかわかぬに夕立の
そらさりげなくすめる月かな

夏日

渡乃原を来北朝日子能
御影恐支六月酒空
眞淵

蹟筆眞淵賀茂

大びえや小びえの雲のめぐりきて

賀茂眞淵

ゆふだちすなり粟津野の原

藤原家隆

かぜそよぐならの小川の夕暮は

みそぎぞ夏のしるしなりける

西行法師

みちのべの清水ながるゝ柳かげ

しばしとてこそ立ちとまりつれ

一五 道程を愛する心

鶴見祐輔

二月三月から四月へかけては、乾き切つた北風が上州の桑畑と
空田との上を飄々と吹過ぎる。赤城や榛名の白い嶺が青空にこび
りついてゐる。その名物の風が四月の半ば頃からぱたり止んで、
小川の畔にたんほゝが咲出し、どこから来たのか蝶が舞出す。と、私
は釣竿を肩に擔いで、夢の様な楽しみにぞく／＼しながら、近所の
沼へふな釣に出掛けたものである。それは私の十歳頃の事で、私の
家が上州の南外れの新町にあつた時代である。風のない静かな日、

(一)思想家。明治
十八年群馬縣
に生れた。英三
部物語、英雄
待望論、歐米
大陸遊記等の
著がある。
(二)上野國(群馬
縣)。
(三)群馬縣にあり、
高さ一八二八
メートル。
(四)群馬縣にあり、
高さ一三九一
メートル。
ふな(鮒)

麗かな日影を一杯に受けながら、私はたんほゝや紫雲英れんびの咲いた川岸に腰を掛けて、小波すら立たない青い水の上に、ぼつり浮いてゐる浮子を一心に眺めてゐた。をりくびくくと浮子が動く。「今食べてゐるな。」さう思つて顔のほてる様な喜を感じた。と、浮子がまただらりと横に寝てしまふ。止めたな。さう思ひながら、でも一分も油断せずに浮子を見詰めてゐる。

その少年の日を、私はある懐かしさをもつて思ひ出す。春の日、魚釣、夢の様な期待。——その一切がまざくと心に蘇つて来る。その陶酔の心持を、私は人生の貴重な断片として秘藏する。その浮子を眺めてゐた私の心の中には、必ずしも大きいふなを釣上げようなどといふ功名心だけが躍つてゐたのではない。春の野邊のよい空気を吸つて、身體を健康にしようなど、いふ手輕な功利觀念は、素より毫末もなかつた。況や釣れたふなで今宵の食膳を賑はさうな

忘我

ど、いふさもしい根性に至つては、うの毛程もなかつたのである。唯少年の私は、浮子の浮き沈みを見てゐるのが嬉しかつたのである。その無心な忘我の心持を、貴いものとして私は想ひ起すのである。

年を取つて後も、吾々はをりくかゝる心境に彷徨ひ込む事がある。それは山路などを一人で歩いて行くをりである。目的地に早く著かうといふ囚れた心持ではない。ぼんやりと周囲の自然に魅せられて歩んでゐるのである。それは二つながら共通の心持である。それは目的の達成に執著する心でなくて、目的に達する道行を愛する心である。事業の結果よりも、その結果にたどり著く道程を尙しとする心である。結果を尙ぶ功利觀よりも、結果を作りつゝある精神の働を高しとする理想觀である。更には人の世の成敗の迹よりも、成敗の底に流れて、成敗の外にある精神力を崇める心であ

功利觀
理想觀

る。この心持の相違が、吾々の人生觀の根本を決定する。

結果を重んずる人は、どうにかしてこの世に於て結果を擧げなければならぬとする。故に一切の活動と精魂をば、擧げてこの結果獲得の最終目的にのみ供するのである。いかなる智術を以てしても、いかなる手段を用ひても、いかなる犠牲を拂つても、この現實の結果完成の爲に努力しなければならぬ。それが俗惡非道と言はれようとも、一切は目的達成の爲に是認される。仁義も、道徳も、人情も、要はかゝる目的達成の手段に過ぎない。故に道徳の命令と、目的達成の成否とが衝突する時は、道徳をば躊躇なく泥溝のうちに遺棄してしまふ。道徳も、仁義も、自己の目的達成に支障なき範圍内に於ての事である。

道程を愛する心は全然これと異なる。ある彫刻家が彫刻をするのは、美しい不朽の作品を作らんが爲に彫刻するのではない。その

鑿の一刻み一刻みに、不朽の生命があるとして楽しむのである。彫る事自身が楽しみなのである。更には、かゝる美しい作品を腦裏に描き出しつゝ、ある精神の喜である。かゝる彫刻家に取つては、たとひその業が半ばにして、天災の爲にその命は絶え、作品もまた滅びても、彼はその精神力を働かし得た事を感謝しつゝ、死ぬ事が出来るのである。

フランス人ブートミーBoitmyが、ある日知合の某イギリス人の事務室を訪れたところ、そのイギリス人は平生の忙しさに似ず、呆然として、殆ど失心の態に見受けられたので、怪しんでその故を問ふと、主人は答へて、

「私が十數年努力してゐた事が、昨日出來上つてしまった。」
と言ふ。ブートミーは驚いて、

「そんなに苦心した仕事が出来上つたのなら、さぞ愉快でせうに。」

Thmile
Boitmy
歴史家(西紀
一八三五—
九〇六年)

と言ふと、主人は首を振つて、
 「いや、永い間苦心經營した目標が急になつたので、今日から
 何をしていゝか分らないのだ。實に世の中が詰らなくなつた。」
 と言つた。これを聞いたブートミーは心のうちで、イギリスの偉大
 は此所にあると感歎したといふ事である。そのイギリス人は結果
 を愛せずして、結果に到るまでの道程を愛したのである。それは本
 當に勞役を愛し、活動を愛する心である。

最近歐洲に於ては、古代ギリシャの研究がまた旺んになつた。斯道
 の大家たるある大學教授が、古代ギリシャの偉大を説いて、古代ギリ
 シャが世界文化史上にかゝる特有な地位を占めるのは、その完成し
 た文化自身の故ではなくて、この文化を生んだ精神の爲である。そ
 の集積した知識の總和の爲ではなくて、知識を愛する情操の故で
 ある。その整然たる社會制度の爲ではなくて、その社會の爲に身を

賭して惜しまなかつた義勇心の故である。と評したのは、頗る味は
 ふべき言葉である。

地中海文明時代に水の國ギリシャの文化があつた。大西洋文明時
 代に水の國イギリスの文化があつた。太平洋文明時代に、水の國日
 本の文化は果して起るであらうか。

あゝ、道程を愛する心。何と尊ぶべき心境ではないか。吾々はかの
 イギリス人のもつた偉大な精神や、古代ギリシャ人の義勇心に學ば
 なければならぬ。

——中道を歩む心——

一六 海と日本文學

幸田露伴

我が邦は四圍皆海にして、繁華殷富なる都市は海岸線に多く、隨
 つて人口もまた、古來、海岸線に於て稠密なりし事疑ふべからず。さ
 れば邦人の生活には、直接間接に海と相離るべからざる關係を有

(一)小説家、文學
 博士、慶應三年成
 江戶に生れた、
 五重塔、心録、
 佛著、あり、
 集すべが、露伴、
 て集める。

する事少からず。随つて、我が邦の文學も、またおのづから海と少からざる關係を有すべき理なり。例へば、潮來り汐去る面白さを詠じたる歌、または晴れたる日の親しむべく、風だてる日の怖るべき海原の様を記せし文、或はまた浪のはてより上る日のうるはしさ、島山のあなたに傾き落つる月の哀れさなどを寫せしもの、勇ましき舟子が上を傳へたる小説などは、我が邦の文學に多く現るべきはずならずや。

(二十卷) 延喜五年(一五六年)紀貫之、内躬恒、凡河内躬恒、忠岑等が醍醐天皇の勅を撰進したる歌集

然るに事實はいたくこれに反せり。和歌には海に關するもの甚だ少し。偶、これなきにあらずと雖も、多くは海を怖れ海を厭へるが如き思想を有するものにて、海國民の歌としてはふさはしからぬものとや言はん。誠に悲しげなるもののみなり。試に古今集以後の敕撰の歌集、または一家の歌集の類を手にして、漁夫、舟人の類を詠じたる歌をあらため見よ。その世渡の危きを悲しみ憐む意の痕を

留めざるもの幾何かある。また萬里の海を我が路として、八方の風を驅役する舟人の意氣を詠じたる和歌、または千尋の波の底より吞舟の大魚を獲て、舷頭に獨り嘯く漁夫の感興を描ける章の如き幾何かある。和歌衰へて後の俳諧、發句は、新しき酒を盛れる小さき囊なり。されどこの囊の中にも、海に對する人の心を勵まし、勇ましむるに足るべき好き酒の盛られたる事は幾何もあらずして、却つてせつかくの新しき囊に、平安朝以來の海を怖るゝ古き思想の、譬へば腐りたる酒の如きものの盛られたる事少からぬ様見ゆ。小説は宇津保物語、源氏物語の昔より、海とだに言へば怖るべきものの様を描けるが多し。風に遇ひて船の破るゝ事、または思はぬ方へ吹流さるる事などは、古來の小説家の好みて描ける所なるが、その物語は大抵、机上にて作者が海に對する自己の恐怖心より捻り出したる曖昧無實のものたるに過ぎず、一も眞實らしき状態を描きて、

(一) 平安時代の物語、二十卷、作者不明。
(二) 平安時代の物語、五十四帖、作者は紫式部

矚目に値す

海上の光景を讀者に感知せしむるものなし。さればそれ等の物語は、徒にその讀者をして、海の怖るべき事を空想上に深く思ひ浸ましむる外には、何の結果をも遺す事なし。古來の小説少からずと雖も、海員の生活、船上の旅客の眞情等を書現せしものの如きは幾何かある。余は實にある一章にすら、海に關する記事の、稍矚目に値すべきものを含める小説の名を指し示す能はざるを悲しまざるを得ず。謠曲、淨瑠璃もまた然り。作者が海に對する恐怖心の外には、海に關する記事中に於て見出し得べきものなしと言ふも不可なきに似たり。若し強ひてその外に何物をか尋ね得たらんには、それは海神、龍王等に對する迷信ならんのみ。かくの如く、和歌、俳句、小説、謠曲、淨瑠璃等と海との關係を考察するに、良好の状態を呈し居らざるは我が邦文學の事實にして、いかにこれを辯護せんとすとも、何人もその辭なきに窮せざるを得ざる所なり。

かくの如く、我が邦と海との地理上の關係に、文學の相應せざる事甚だしけれども、これによつて直ちに我が邦の歌人、俳諧師、小説家、謠曲及び淨瑠璃の作者等を、思想偏僻なり、眼界狹小なり、伎倆拙悪なりと爲さんは餘りに酷にして、雅量に乏しき判斷となさざるべからず。如何となれば、その邦の文學はその地理に相應して發達繁榮すべきものなるのみならず、また實にその歴史に相應して發達繁榮するものなればなり。されば我が邦と海との地理上の關係を考察するが如く、我が邦と海との歴史上の關係をもまた考察せずんば、我が邦の文學を論ずるに於て、その判斷の中正を得ざるべきは言ふまでもなし。

然らば我が邦と海との歴史上の關係は如何。徳川氏は大船を造る事を禁じ、海外諸國と交通する事を欲せざりき。陸上の交通、驛傳の諸法は甚だ整理せられたるに拘らず、海上の交通、舟運の利は甚

(一)三重縣(志摩國)志摩郡鳥羽町

(二)靜岡縣(伊豆國)賀茂郡下田町

壺中に遊樂す

(三)第五十代

だ輕視せられて、膽勇ある豪商等の經營の外には、政府も士人も殆ど指を海事に染めず、諸侯の參勤交替の如きも、皆必ず陸路を取りしが如きは、最近三百年の歴史なり。舟子が志州の鳥羽(一)より豆州の下田(二)に至る航路を以て、非常の難關と思惟し、旅客が中國諸港より讚州多度津に至る短距離の航海を以て、大冒險の如く恐怖し、一般の人民が、大罪人と舟子との外は、海に航すべきにあらずと考へ、婦女子が海を以て龍神、海坊主、船幽靈等の巢窟と信じたりしは、徳川氏が我が邦民をして壺中に遊樂せしめし政治の結果なり。かくの如き歴史上の状態によりて考察する時は、我が邦の文學と海との關係は、地理上には相應せざれども、歴史とはよく相應吻合せりと言ふべし。

また徳川氏以前に於ては、足利氏が京都に據りたる(三)、桓武天皇が山城の山間に都を奠め給ひたる、なほその以前にありては、大和の

(一)第百十三代東山天皇の御代、徳川五代將軍綱吉の世(二二三—三四八—三六三年)

篇什

(二)二十卷。撰者未詳。第百十六代仁徳天皇の御代から第百十七代天智天皇の御代までの歌を収めてある。

地に都の奠められたるなども、著しく我が邦の文學をして海と相遠ざからしめたり。特に元祿以前(一)の文學は、國民の文學と言はんよりは、寧ろ貴者の文學と言ふべきものなれば、その國都の海邊を離れし山間に置かれたりしは、都府の住者たる貴者をして海に遠ざからしめ、隨つて、また我が邦の文學をして海に遠ざかるに至らしめし大原因なりと言ふべし。かくの如くにして、奈良、京都の文學者、即ち我が邦の文學の父たり母たる位置に立てる文學者よりして、海と言へば須磨、明石、若しくは紀州の海邊の外は知らざる如き知識感情を相承せしを以て、その兒孫たる文學者が、今に至るまで、我が邦の文學史を飾るに足るべき海に關する篇什を出さざるは、敢へて怪しむに足らずとや言はん。

都の大和にありし間遣唐使の存せし事は、萬葉集をして、古今集よりも海に關する歌を聊か多く包含せしめたり。古今集を讀終り

遡つて萬葉集を讀まば、この集の作者等が、かの集の作者等よりも海に親しかりし事は、何人もこれを認め得ん。これまた海に對しては、我が文學が我が歴史に相應せる一證なり。

萬葉集以前は載籍甚だ乏しければ、吾人をして精細確實なる斷案を下す能はざらしむれども、古今集を抛つて萬葉集に就けるが如くに、萬葉集を讀終つて古事記、^(一)日本紀等に見えたる傳説、歌謠を見る時は、吾人は海國の民として此所に一種の愉快を感ぜずんばあらず。そは我が邦上古の文學は、歴史上にも地理上にも能く相吻合して、我が祖先等が海に對する思想、感情及び知識の、決して萎縮的ならざりし事を知ればなり。實に記紀には、海並びに船舶に關する記事の多き事、平安朝以來の書史には決してその比を見る能はざる程にして、これ明らかに我が本來の日本人、即ち歴史的の繫縛を被らざりし時代の邦人が、後世の邦人の海に對して畏怖心をの

^(一)三卷、禮の口述を太
安萬侶が筆録
した國史で、
和銅五年（一
三七二年）に
成つた。
^(二)三十卷、元正
天皇の敕を受
けて舍人親王
太安萬侶等が
養老四年（一
三〇四年）に
撰進した國史

み抱くが如くならざりし事を證するものにあらずや。

我が邦の地理上の状態は、我が邦の文學をして海に親しましむべき因を有す。然るに歴史上の状態は、上世を除きては、我が邦の文學をして海に遠ざからしむべき因を爲せし事上述の如し。かくの如くにして我が邦の文學は、海國の文學としては甚だ相應せざる状態を有するに至れり。然れども、これ實に歴史上の關係の壓迫に因れる事上述の如くにして、邦人本來の性質は、海洋に對して怯懦なるにあらず。また古來の歌客、文人の思想の偏僻、眼界の狭小、伎倆の拙劣なるのみよりして、かくの如きに至れりと爲すべきにもあらざるは、歴史の繫縛を被らざりし時代の人の手に成れる記紀の中に、海に關する記事の多きに照して、極めて明らかなる事なりとす。海中に國を成せる我が邦の人にして、吞海の氣象なくんば、いかで世界に雄を稱するを得ん。地理上の状態は千古渝らず、歴史上の

状態は雲煙去來す。今や我が邦は、山間の狭き平地に安きを偷みしが如き昔時の愚をば二たびせず、また國を鎖し海を封ぜし近古の陋をば二たびせず、膽勇ある邦人は島内にのみ安居するに堪へず、海に親しむ事は日に月に多くなり行くなり。海國の所産たるに相應する文學は、蓋し今日以後に成らん。

—露伴全集—

一七 長安の空

大ふねにまかぢ繁貫きこの吾子を

からくにへやるいはへ神たち

光明皇后は御甥藤原清河が遣唐使となつて唐へ赴かうとした時、その航路の平安をかく祈らせられた。清河はこれに答へ奉つて、

かすが野にいつく三諸の梅の花

榮えてあり待てかへり來んまで

(一)萬葉集卷十九

(二)中衛大將房前の第四子、天平勝寶九年(四一七年)唐で歿した。年七十三。
(三)萬葉集卷十九

鹿島立

と歌つた。

優雅な歌の贈答に現れた明るい晴々しい鹿島立。遣唐使は奈良朝から平安朝へかけて、廷臣が賜はる最も赫かしい、最も榮譽ある任務であつた。それは國と國との公の交際を掌るばかりでなく、文化の媒介といふ意義深い使命を持つものであつた。

孝謙天皇の天平勝寶四年、藤原清河は遣唐大使として唐に渡り、長安の都を訪れて、玄宗皇帝に謁見した。清河は貴顯の出であると共に學識も深く、その閑雅な儀容はいたく唐の朝廷を驚かした。驕傲一世に鳴つた玄宗皇帝も、

「かの國賢主あり。今その使臣を観るに、舉止常に異なり。」

と稱し、日本の國を號して有義禮儀君子之國と言つたといふ。またこの時の副使大伴古麻呂は、正月の賀を受けるに當つて、我が使節の列位が新羅の下位にあるのを難じて、これを改めさせたと傳へ

舉止

(一)第四十六代。
(二)一四一二年。
(三)唐の第六代の皇帝。睿宗の第三子。睿宗の元年(西紀七六二年)歿。年七十七。

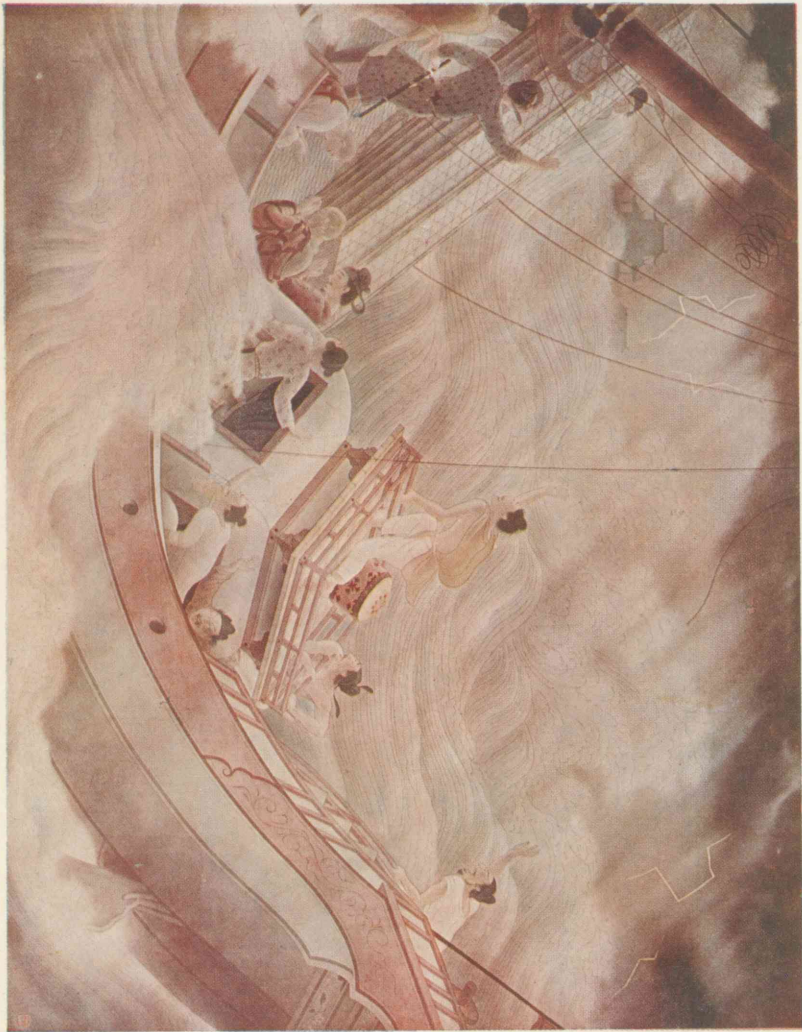
宣揚する

(一)第三十四代
 (二)一八九〇年
 (三)樂師惠日と共
 に遣唐使とな
 り、舒明天皇
 の四年唐使高
 祖仁と共に歸
 朝した。
 (四)經術を以て稱
 せられ、中大
 兄皇子は、鎌足
 と共に周孔の足
 教をその家て
 學ばれた。
 (五)隋に留學する
 こと三十三年
 歸つて國博士
 となり、詔を
 奉じて八省百
 官を議した。な
 後遣唐使とな
 り、かの地で
 歿した。

られてゐる。重き君命を受けて遠く異國に使し、善く國威を宣揚した清河たち。彼等はたゞに文化の仲介者であつたばかりでなく、國賓の體面、祖國の面目をも輝かして、善くその使命を果したのである。

遣唐使の派遣は舒明天皇の二年、^(一)犬上御田鍬^(二)が始めて唐に遣されて以來、仁明天皇の御代まで十數回の多きに及んだ。當時支那は漢族の勢威が四方に張つて、東西兩文明の融合も圖られ、唐都長安は正に世界的文明の中心たるの觀があつた。遣唐使は實にその文化を慕つて送られた國際的の使節であつた。そしてその都度必ず留學生や學問僧を從へ、また中には琴を弾じ、琵琶を善くするなど、一藝一能の才ある者をも伴なつて行つた。

長安の空にあこがれて海を渡つた文化の先人。彼等は親しく唐の文化を尋ねて歸朝した。かの大化の改新に與つた南淵請安^(三)高向^(四)



陸 近 し 中 村 景 隆 筆

(一)舒明天皇の四年、唐使高表仁に隨つて歸來した。博士となつた。白雉四年(三三二年)寂。(二)本姓は下道朝臣。仲麻呂と共に留學した。修めりて歸史となつた。大龜六(三)寶龜六年(八三三年)上つた。四寶龜五年(八三三年)上つた。年八十三(三)歿。

(四)第五十四代。葛野麻呂の子。承和三年(七一四年)に遣つて唐に使し、洋中泊風に遭つて、五年に歸赴した。六年再歸朝した。七年(七一五年)歿した。十四年(七一四年)同。

玄理(一)、僧旻等は、實に先に小野妹子の再度の渡航に隨つて隋に渡つた留學生であつた。奈良の朝廷に才學を以て著れた吉備眞備や、平安時代の初め佛教界に清新の新宗派を唱道して活躍した最澄や、空海も、共に等しく唐に留學した學生、僧侶であつた。

遣唐使には普通大使と副使との外に、判官、録子といふ者が數名あつた。その外、翻譯掛の譯語や、航海に従事する水手などが加り、これに留學生や學問僧を加へて、一行は二三百人の多きに上り、時としては六百人近くの多數に達した事もあつた。その乗船は大抵四艘であつたから、これを「四の船」と言つた。そして第一船には大使、第二船には副使が便乗する定めであつた。(二)仁明天皇の御代に遣唐使を派遣された際、第一船は最も堅牢であるといふので大使藤原常嗣が乗り、第二船には副使小野篁が乗る事となつた。然るに、出帆後間もなく逆風に遭つて引返し、第一船は修繕を加へた爲、第二船が

(あまつさへ)
(剩)

逆鱗に觸れる

(一)第四十九代。
(二)太宰大貳老の
子。遣唐副使。
(三)一四三八年。

最も堅牢になつたといふので、常嗣は朝廷に奏して俄に次第を變へ、第二船を以て第一船とした。そこで篁はこれを憤り、病と稱して乗船せず、あまつさへ詩を作つて遣唐の事を諷したので、嵯峨上皇の逆鱗に觸れて、隱岐に流されたといふ。
當時造船術が幼稚で、且航海術もまだ頗る進歩しなかつたので、途中多少とも風波の難を受けて、全く事なく歸朝する事は稀であつた。中にも、光仁天皇の御代に遣された小野石根(一)が、無事に使命を果して歸朝の途に就き、蘇州を發したのは寶龜九年十一月であつたが、幾何もなく風浪が俄に起り、船は眞二つに切斷されて、石根以下三十八人並びに唐使趙寶英等二十五人は、終に海に没して失せられた。その他これに類した慘事は頻々として起り、遣唐使として任命される事は、名譽ではあるが、恰も戰場へ向ふ様に、生別即ち死別となる有様であつた。されば中には病と詐稱し、或は父母の喪中と稱

愛別離苦

行を盛んにする

(一)大納言小黒麻呂の長子。(延暦二十一年)唐に赴き、暴風に遭ひ、船破れ、三年再び赴いた。三年、再赴いた。弘仁九年、朝に闕した。四年、弘仁九年、朝に闕した。四年、弘仁九年、朝に闕した。

へて、その任を避けようとする者さへあつた。壯途へ立つ者も、これを送る者も、共に愛別離苦の歎をかこつ事深く、

から國にゆきたら、はしてかへり來ん

ますらたけをにみきたてまつる

と、別れを惜しまれながらも、使節は幾度か立つた。朝廷におかせられては、また饗餞の際に、畏くも御製の御歌を賜ひ、或は御衣、黄金などを賜はつて、その行を盛んにせられたのであつた。桓武天皇の御代に大使藤原葛野麻呂等の出發する際の饗宴には、特に漢法とて支那料理を以てせられ、

このみきはおほにはあらずたひらかに

かへりきませといはひたるみき

といふ御製まで賜はつた。

國際的使節の榮譽の前に、彼等は身命を賭して渡航した。そして高貴な文明を相次いで我が國に傳へ、我が文化を高め且深めたのである。青丹よし奈良の都の文化、燦然たる王朝の學藝など、我が國文化の根柢は、皆彼等の辛苦によつて築かれた。それは遠く近世日

基を固めたものであつた。思へばこれ等先人の獻身的努力は大きかつた。

遣唐使は誠に晴れの使節であつたが、一度國を出でて歸來の機



阿倍仲麻呂 (小堀鞆筆)

本の文化
的躍進、明
治維新以
後我が國
人の轉生
的發展の

(一)中務大輔船守の子。靈龜二年(一三三七年)選ばれて遣唐留學生となつた。時に年十六。時に僧。奈良興福寺の僧。

(二)第四十四代。一三七七年。

(三)島左大臣の子。唐に使し、養老二年歸り、諸官に歴任して、中納言に至り、天平九年(一三九七年)歿、年七十。

(四)唐代の詩人。書畫にも勝れてゐた。

(五)唐代の詩人。字は太白。杜甫と共に當時最も傑出した。

を失ひ、遂に骨を異域に埋めた阿倍仲麻呂や藤原清河などの事を懷ひ起すと、覺えず暗涙を催させられるのである。

仲麻呂は吉備眞備や僧玄昉と共に、元正天皇の養老元年に遣唐使多治比縣守に隨つて入唐し、唐の玄宗皇帝に重用され、姓名を朝衡と改め、王維李白等の詩人と交り、名を文墨の間に馳せたが、孝謙天皇の御代に遣唐大使藤原清河等の唐に到つて歸國するに臨み、仲麻呂も既に在唐三十六年の久しきに及んだので、共に歸らん事を請うた。玄宗はこれを許し、仲麻呂を以て送使とした。かくて仲麻呂は明州に到り、乗船しようとする、偶、明月の皎々たるを觀て、望郷の念に堪へず、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

と詠んだ。年々歳々同じく照す月に對する人はいつしか變り、嘗て

辛酸を嘗める

三笠山上に皎々たる月を仰ぎ、三十餘年の後、異域にあつて同じ月に對した仲麻呂が、今や幾何もなく再び故山に月影を踏まうとするに當つて、その感慨は誠に無量なるものがあつたであらう。その風懷はこの絶唱を後世に遺して、餘情を傳へてゐる。然るに何事ぞ、海上颯風に遭つて、第二、第三、第四船は辛うじて我が國に歸つたが、清河、仲麻呂等の第一船は安南に漂著し、その後非常な辛酸を嘗めて唐に歸り、清河は名を河清と改め、相共に唐朝に仕へて果てた。遣唐使の長き歴史の上に、特に哀愁深い物語であつた。

遣唐使は宇多天皇の御代、菅原道眞が大使に任命され、偶、唐の國內擾亂の報を得て、自ら渡海の困難な事情を奏上して停止されん事を請ひ奉り、遂に廢止の事となつた。

平和の使節交換正に二百年、大陸の高貴な文明は我が國土に移植されて、我が文化の向上を促した事は測り知れない。歴史に輝く

遣唐使の名、それには先人の異常な努力が潜んでゐる。坐ろに往時を回想する時、これ等先人の祖國に致した業績に、感謝の念の高まるを覺えるではないか。

自修文

海洋文化國としての日本

内ヶ崎作三郎

嘗て日本は、世界の他の國々から、神祕の國、桃源の仙境として、一風變つた國と思はれて來た。それは言ふまでもなく、日本が海洋の眞直中に置かれた島國であつて、世界は愚か、近い朝鮮支那に對してすらも、往來の不便な爲に頻繁に交通しなかつた結果として、日本獨得の國情、風俗、習慣が發達して居つたからである。それも徳川時代の二百數十年の間、鎖國生活をjする事がなかつたならば、もう少し西洋に接近した國情になつたであらうが、鎖國斷行の結果は、室咲の梅の様に、色も好く枝ぶりも面白いが、しかし、どこことなく窮屈で不自然な趣を加へた事は、日本人自ら

政治家、英文學者、早稲田大學講師、明治十年宮城縣明に生れた、リンカ生學、リンカある。

室咲
温室で咲かせた花。

隔絶する
遠くかけはな
れてゐる。

も承認せねばならぬ。
ヨーロッパの國々はあの狭い土地に、幾多の國家が境を接して文化を競ふのであるから、自然相互の間に連絡もあり、統一もついで、風俗習慣、すべての國情が大抵、似たり寄つたりの状態にある。食物にしても、イギリス流の料理と、フランス風の料理と、ドイツ式の料理と、多少の違はあつても、大體に於ては同じである。然るにアジヤとなると、土地が廣大で、山河が隔絶してゐる爲に交通不便で、文化の連絡も統一もなかく、むづかしい。それは、日本と朝鮮と支那との料理の相違の甚だしいのを見ても分る。衣服の形から色彩の好みを見ても分る。紙の家と言はれる日本の家と、温突をんさつを持つ朝鮮の家とを見れば分る。寢臺の上に眠り、靴のまゝで床の上を歩く支那人と、疊の上に坐る日本人とを見れば分る。西洋の文明には統一はあるが變化がない。東洋のそれには統一はないが複雑な特色がある。

基因する
もとづく。

一目瞭然
一目見てあき
らかなこと。

暖流黒潮
フィリッピン
に起り、北上
して日本列島
の近海に沿う
て流れる海流
鹽分強く、濃
藍色を呈し、
温度が高い。
寒流親潮
千島列島に沿
うて南下する
海流。温度が
低い。

かう考へてみると、我が國の文化には、非常な特色のある事を思はなければならぬ。それが皆我が國の海洋國である事に基因するが故に、私はこの特色を名附けて、海洋文化と稱したいのである。或は島國文化と言つても差支ない。
地圖を披ひいて見れば、日本が海洋國である事は一目瞭然ひとまへであるに拘らず、國民自らは、一向にそれを珍しいと思はず、足一たび大陸に踏出して、始めて自國の海洋國である事に氣附く様な次第である。それではならない。どうしても我が國民は自ら海洋國民である事を常に強く意識して、自らの特性を自覺し、自らをより良くする事に努力しなければならぬ。
海洋文化國の特色は、何と言つても氣候である。我が國は氣候溫和にして、夏も凌ぎ難からず、冬と雖もさまで寒からず。とは、小學兒童も言ふ所であるが、それは皆この島國の岸を洗ふ暖流黒潮しほと、寒流親潮おひしほとの作用に外ならぬ。

明媚 清く美しいこと
 山紫水明 山の色は紫に、水の色は明るいといふ意
 滾々 水の盛んに流れるさま

(1) Penin.
 (西班牙)

突飛 だしぬげに行ふこと、思ひきつた事をすること
 忍従 苦しみに堪へること

海に浮んだ船の様な我が日本は、常に水蒸氣に富んでゐる。それが雨となり、雪となり、霞や霧や霜となる。風光明媚だの、山紫水明だのといふ我が國の自然の美は、全くその賜である事を知らねばならぬ。

雨が多い爲に、到る所井戸を穿てば清く冷たい眞清水が滾々として涌出する。清き水の供給される所、其所におのづから清潔を好む性情が養はれた。

日本人の氣性が感情的、神經質的であるのは、温帯人の特徴であつて、イタリー人、スペイン人、フランス人などと共通する所であるが、しかもそれ等の國民との間に著しい相違のあるのは、雨の影響に負ふ所が多い。げに雨は色々人の性情を作る。殊に春雨といひ、梅雨といひ、秋雨といひ、數日、數週間に亙る雨天は、知らず識らずの間に、我が國民に忍耐性を與へた。一面突飛な様で、一面忍従の精神があるのはこれが爲である。日本はまた風の國だ。太

明哲 はつきりしてあきらかなこと
 革新的精神 不適當なもの(はどん)であらためてゆかうとする精神
 極端から極端へ走る 非常に突飛なことはかりすること
 抛棄 すててしまふこと
 專制政治 國家の元首がほしいままに行ふ政治
 反動 はれかへり。
 革命 暴力行動等によつて急激に國體または政體を變更すること
 Russia (露西亞)

平洋から、日本海から絶えず寒暖の風を吹送る。風は人の頭腦を明哲にし、思考力を發達せしめ、同時に心氣を爽快にして仕事の能率を高める。日本人が常に進歩的で、革新的精神の旺盛なのは、これが爲である。

大陸はさうでない。寒さも極端なら、暑さも極端である。季節によつては殆ど雨が降らない。これが大陸人にどう影響するかは、問はずして明らかである。彼等は極端から極端へ走る。支那人は極端に悪人になると共に、また極端に善人になる。印度には貪慾な人間が非常に多い。その代りにはまた一切を抛棄した釋尊の様な大人格もあるのである。これを政治的に考察すると、勝利者は極端な專制政治を行ひ、極端に苛酷な法令を布く。その代りに反動も烈しく、其所に必ず革命を伴なふのである。支那がさうだ。ロシアがさうだ。

大陸はまた國境の確定と保全とが頗る困難である。萬里の長

保全
安全にたもち
全うすること

要塞

國防上、必要
な地點に設け
る永久的のた
りて

堡壘

要塞の小規模
なもの

物々しい
仰山らしい

穩健中正

おたやかまし
つかりしてな
り、片よらず
正しいこと

上下協調

君と民とが心
をあはせて圓
満に進んで行
くこと

彪大

ひろがつて大
きなこと

城を築いたのは、遠い昔の支那の事とのみは思はれない。今日と雖も、大戦前のドイツとロシヤの如き、またフランスとドイツの如き、その國境は長城ならぬ幾多の要塞堡壘を以て、實に物々しく固められたものである。

人間の造つた長城は遂に失敗に歸したが、天の作せる朝鮮海峡や支那海峡は、アジア大陸の遠征軍に對して、萬里の長城に何百倍するの大要害であつた。島國の日本は、國境の保全に於てかくの如く多く恵まれて來た。日本が三千年來、國家として完全に獨立を保ち、文化史上獨得の發達を遂げ來つたのはこの故である。政治も穩健中正で極端に走らず、上下協調を維持して來たのも、この民性、國情の所爲であつて、要するに、海洋國たるが故に外ならぬ。かういふ國がらは、大陸では成立ちにくい。少くともロシヤや支那の様な彪大な領土、茫漠たる大陸では出來ない事である。支那やロシヤを旅行した人が、一度日本に足を踏入れるや、始

安堵の思
ほつとして安
心する思

貢獻する
力を盡して、
爲になること
をする

(一) 詩人、歌人
名は又次郎。
御歌所寄人。
明治五年東京
市に生れた。
花紅葉文學
概論、新撰詠
歌法等の著
がある

めてほつと一息ついて安堵の思をするといふ——それはかうした國がらによるものと言はねばなるまい。海洋國の特色、惠まれた島國文化、それを我々は十分に自覺して、其所に日本の使命を認めねばならぬ。島國なるが故に國家として纏り易い。その上に、三千年來の國がらである。理想的の國民文化を作り出して世界の文化に貢獻し得る者、我々日本人を措いてそれ誰ぞや。これ日本國民の光榮ある義務であり、特權ではないか。日本の使命は實に此所にあるのではあるまいか。

一八 夏の夕風

武島羽衣

雨をもよほすおほ空の
雲にとぢたる夕まぐれ、
暑さにうめる窓の戸に、
涼しさおくる夕風よ、

八重の潮路のわたの原
片帆を送り眞帆迎へ、
花咲く浪にまじりつゝ、
汝は今までありつらん。

行け、野に山に川の面に、
畑に林に谷、岡に、
空うち仰ぎ汝を待てる
街に巷に家々に。

軒端に巢くふむらすゞめ、
吹きて夢路を清うせよ。



(筆洋耕田柴) 帆片帆眞

草の下ゆくさゞれ水、
吹きて涼しき聲そへよ。

千枝さしおほふ奥山の
杉の梢の深きかげ、
いざ吹きたちて靈妙の
樂の調をひゞかせよ。

あゝ、美しき花のうへ、
あゝ、芳しき草のもと、
吹きわたり行く汝が身は、
いかに楽しくおぼゆらん。

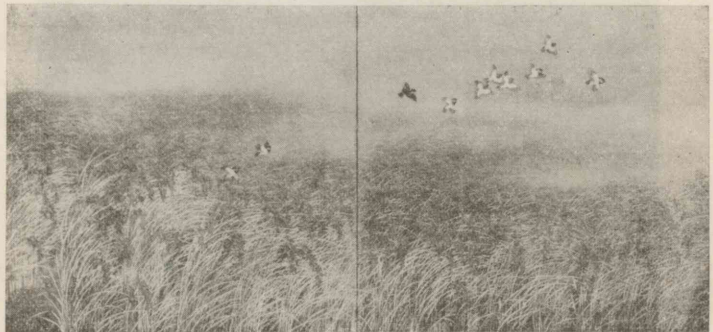


(筆博田吉) 風く吹草

罪とが知らぬみどり子の
ねむりの枕なづる時、
汝が音いかに天國の
惠のひゞきもらすらん。

影とやせたるおいびとの
病のとこをたづねては、
汝が涼しさはいかばかり、
いまはの命のばすらん。

はぐさ取るなる五百代の
田の面の穂の上吹ききては、
汝が手よいかに賤の男が、



かたゆ (筆畝月木荒)

あゆ

あゆる汗をばぬぐふらん。

行け野に山に谷岡に、
畑に巷に家々に、
さて行け汝がふるさとの
大海原の沖の上に。

浪より浪をわたりつゝ、
またかへりみぬふるさとの
夢も結ばぬかぢまくら、
しづ心なき船人は、

汝がなつかしき音なひに

馴れし故園の森の陰、
小川のさまをおもかげに、
うかべて心なぐさめん。

一九 松葉仙人

(一)今大阪府南河内郡天野村行基の開基

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ども成りて飛びありくと。言ふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やうく、兩三年に成りにけるに、げにも身も軽くなる心地しければ、弟子どもにも、
「我は仙人になりなるとするなり」と常は言ひて、今々とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。既に飛びて登りなると言ひて、坊も何も弟子どもに分ち譲りて、登りなば仙衣を著るべし」とて、かたの如

そは

さげたま

く、腰に物をひとへ巻きて出立つに、我が身にはこれより外はいるべき物なし」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に著けて、既に出でにけり。弟子、同朋、名残を惜しみて悲しぶ。聞及ぶ人、遠近市の如くに集りて、仙に登る人見んとて、つどひたりけるに、この僧、片山のそはにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ昇りなんと思へども、先づ近く遊びて、事の様人々に見せ奉らん」とて、かの巖の上より、下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばんと言ひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈許ありけるに、さげさまに飛ぶ人、人目を澄し、哀れを浮べたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うきくとして弱りにければ、飛びはづして、谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、これ程の事なれば、様あらん。定めて飛揚らんずらんと見る程に、谷の底の巖に當りて、水瓶も割れ、我が身も散々に打損じて、唯死にに死ぬれば、弟子、眷

とかくして
かどまりのた

(一)吉野朝時代の
文學者、歌人、
京都の人、正
平五年(二〇
一〇年)寂、年
六十八

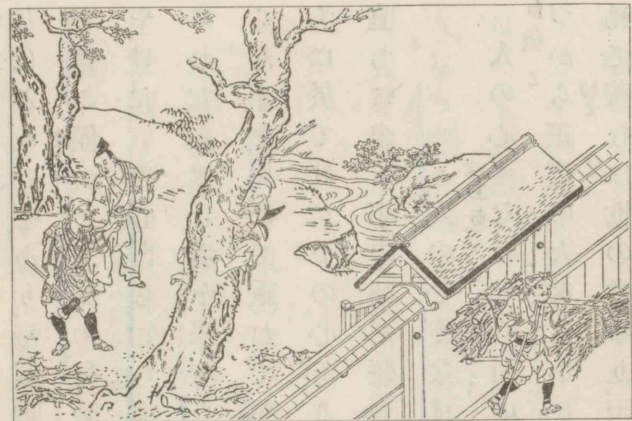
屬騷いんさうぎ寄りて、いかにどうしんかと問へば、いらへもせず、僅かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊にかき入いれいれつ。爰こゝに集あつめる人、笑ひのしりて歸りけり。さてこの僧、あるにもあらぬ様にて痛み臥せり。とかく言ふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじう食ひのきたる五穀をもて様々さまざまいたはり養へば命ばかりは生くれども、足、手、腰も打折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、本の如く五穀貪り食ひて、弟子どもにゆましく譲りたりし坊も、寶も取返してかかまりのたり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。——十訓抄——

二〇 高名の木のぼり

吉田兼好

高名の木のぼりせうのんのかのぼりといひし、男人をおきてて、高き木に昇せて梢を

あやしき下藤
もろ矢



さらせしさらせしに、いと危く見えし程は言ふ事もなく、おるおる、時に軒た

高名の木のぼり(繪本徒然草所載)

よと言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるともおりなん、いかにかく言ふぞと申し侍りしかば、その事に候、目くるめき枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず、過は安き所になりて、必ず仕る事に候と言ふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめになへり、鞠も難き所を蹴いだして後易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

弓射る事

ある人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて、的に向ふ師の曰

けたいの心
懈怠

く、初心の人、二つの矢を持つ事なけれ、後の矢を頼みて、初めの矢に
なほざりの心あり、毎度唯得失なく、このひと矢に定むべしと思へ。
と言ふ、僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はん
や、けたいの心、自ら知らずと雖も、師これを知る、このいましめ萬事
にわたるべし。道を學する人、夕には且あらん事を思ひ、且には夕あ
らん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期す、いはんや一刹那のう
ちに於て、けたいの心ある事を知らんや、何ぞ只今の一念において、
直ちにする事の甚だ難き。

人の心すなほならねば

人の心すなほならねば、いっはりなきにしもあらず、されど、おの
づから正直の人などかなからん、おのれすなほならねど、人の賢を
見て羨むは世の常なり、至りて愚かなる人は、偶、賢なる人を見てこ
れを憎む、大きな利を得んが爲に、少しきの利を受けず、いっはり

驥(一)支那古代の聖天子有虞氏

文學者、高知市
の、大正十
四年、大正十
七年、黃菊白
菊、日本文明
史、學生訓等
の著者あり
す、桂月全
集に收められ
てある

仁者は山を愛し、知者は水を愛す

論語雍也篇に見え
雲煙浮動す
長野縣と群馬縣との境にあり、活火山あり、高さ二五、四二メートル、富山縣にあり、高さ二、九九二メートル

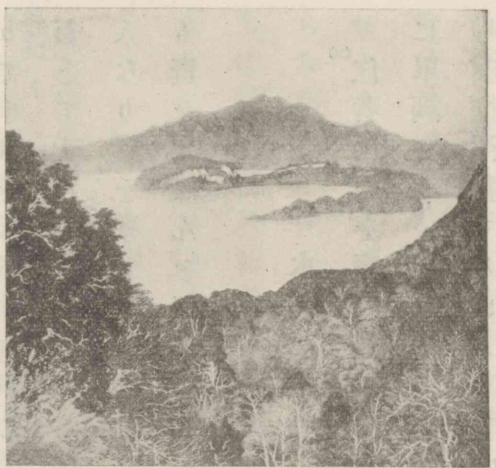
飾りて名を立てんとす」とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、即ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば、悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢を學ばんを賢と言ふべし。——徒然草——

二一 水の美

大町 桂月

仁者は山を愛し、知者は水を愛すとかや、山は靜なり、活動せず。故に單調なり。いかなる名山も、長くこれに對すれば厭かざるを得ず。唯雲煙浮動するによりて、山も活動するが如きを覺ゆ。雲煙は即ち水の變體なり。山に登るに水のなき者は平凡なり。富士山の如く、淺間山の如し。山水を得て始めて奇なり。日光山の如く、立山の如し。水

(一)青森縣の南部
奥羽山脈中に
ある。
(二)栃木縣の男體
山麓にある火
口原湖。



(筆僊麓良奈) 湖 田 和 十

はその活動して止まざる所に美の價値を有す。されどまたその靜なる所にも一種の趣味を有す。山中に於ける瀑と湖とは、この二種の美を表せるものなり。
單に湖と言はずして山中の湖と言ふ。山中の湖とは、陸奥の十和田湖(一)日光の中禪寺湖、箱根の蘆の湖、富士北麓の山中、河口、西、精進、本栖諸湖の類なり。四面の山、浮世を遮りて高低參差、影を湖上に落し、澄波一碧、恰も鏡の如く、山の翠滴らんとして、水は碧瑠璃よりも清し。幽の極なり。靜の極なり。湖畔に踞して水に臨めば、感興何となく胸に涌く。夜色蒼茫の裡、湖心、月を印するに至りては、更に一層の幽趣を添ふ。天地我に

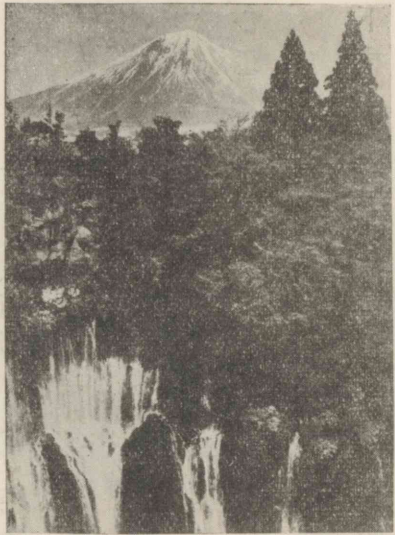
合するかと思はれ、我天地に合するかとも思はる。羽化登仙するが如しなど言はんも、なかなかに愚かなり。
これに反して、活動の美を盡せる者を瀑とす。一落千丈また萬丈、滾々瀉下する様は、終日相對して飽かず。夏觀るに最もよし。一たび瀑に對すれば、人間夏あるを知らず。朝日に映じて虹霓を現ずるも奇なり。崖畔の樹木霜を帯びて紅葉すれば、觀更に奇なり。瀑に懸崖を直下する者あり、日光の華嚴瀑の如し。溪を傳はる者あり、日光の湯瀑の如し。二三段以上に折れたる者あり、立山の稱名瀑の如し。何れも皆觀るべし。



(一)日光火山群中赤難山の東斜面に於ける。上下二段、高さ六十メートル。飛沫煙霧に似る。この名がある。

(二)荒澤川に於ける。もと眺め得たのである。明治三十五年、昔の崩壊した。昔の観た。失つた。

(三)伊岡縣(駿河國)富士郡白糸村にある。



白糸の瀑

日光は瀑が名物なりと稱せらる。されど天下の奇觀と言ふべきは、獨り華嚴瀑のみ。湯瀑稍見るべし。霧降、裏見以下の瀑は、わざわざ行きて見るべき程の價值ある者にあらず。日光に限らず、すべて日本の諸瀑は、高さに於ては見るべき者少からざれども、幅に於て見るべき者はこれなき様なり。唯富士の白糸瀑は幅百八間と稱す。半分は掛値なりとすとも、なほ、五十間の幅あり。水、全壁を蔽へるは、その一部にて、數十

百條相連なりて、水晶簾を掛けたる様なるも、また天下の一奇觀たるを失はず。世に瀑といふ瀑は多けれども、華嚴と白糸とを見れば、先づ以て瀑を語るに足るべし。華嚴は幅數間なれども、五十間餘の

銀河九天より落つ

(一)源を白根山の南に發し、湯の湖に中禪寺湖を貫いて未だ鬼怒川に入らざる。

(二)驛の西方二キロメートル。日光植物園の裏、大谷川にある。

長さあり。白糸は高さ六丈に過ぎざれども、幅は一町くらゐあり。華嚴の瀑壺に下りてこれを仰げば、恰も銀河九天より落つる觀あるべく、その美は崇高の極なり。白糸の瀑壺につけば、玉簾の清風に搖ぐが如く、これは優美の趣を盡せり。憾むらくは、華嚴と同じくこれを日光に見ざる事を。日光七十二瀑、數のみ多くして、觀るべき者は少し。されど水の美は略盡し得たり。

日光町の盡くる所、東照宮の杉林の始らんとする所、清流白玉を散す大谷川の上に、朱欄の神橋、縹緲として懸れり。稍上れば、含滿淵あり。水と岩と鬪ふの一奇觀を呈す。深澤、馬返あたりの溪流、境幽にして水清し。これより一里許の山を上れば、天下の大瀑、華嚴瀑直下す。瀑の上には中禪寺湖あり。東西三里、南北一里、いはゆる山中の湖の稍大なる者なり。更に湖に注ぐ水を遡れば、龍頭瀑あり。湍としては傾斜急に、瀑としては傾斜緩なれども、また一奇觀なり。この水の

(一)戰場ヶ原を隔てて中禪寺湖の北にある

(二)和歌山縣(紀伊國)東西半婁郡の別稱

上、湯瀑となる。長さ華嚴に譲らず、幅は寧ろ華嚴より廣けれど、傾斜の面に懸りて、華嚴の如き雄壯の觀なし。湯瀑は直ちに湯の湖となる。中禪寺湖を五六分したるに過ぎざれども、幽趣は却つて優れり。湖畔の温泉、硫化水素の異臭を放てども、なほ滯留して詩思を養ふに足るべし。日光四十八湖と稱す。されど中禪寺湖と湯の湖とにて、山中の湖の大觀を盡せり。此所より更に白根を攀ぢ、五色湖を觀ずとも、神橋より温泉まで六里の間に於て、靜水の美と動水の美とは絶えず見る事を得べし。

動水の美は瀑のみならず、溪あり、湍あり、急流あり、緩き流あり、終に海となる。溪流の奇は靜にして熊野の



中 禪 寺 湖

(一)奈良縣大善ヶ原山に發する北山川横谷の下流多戸、玉置間の峽谷

(二)島根縣邑智郡井原村江川にある

(三)熊本縣の南部五箇莊附近に發し、南流して八代海に注いでゐる

千里の江陵一日に還る

(四)唐の李白の詩句

(一)鎌倉時代の歌人、畫家、文永二年(一一九二)年九月(一)死

(二)鎌倉時代の歌人、新古今集撰者の一人、仁治二年(一一九〇)年八月(一)死

海八町となり、激して木曾の寢覺の床となり、石見の斷魚溪となる。舟を下すべき急流に至りては、富士川あり、最上川あり、球磨川あり。これを日本の三大急流と稱す。なほ天龍川あるべく、木曾川あるべく、保津川あるべし。一瞬に一二峯送迎し、終に千里の江陵一日に還るの趣あり。溪といひ、急流といひ、その美の一半は地形と巖狀とに待つ。耶馬溪や、昇仙峽や、その奇景は巖山にあれど、水なくんば大いに落莫たるべし。

二二 歌物語

上手の心

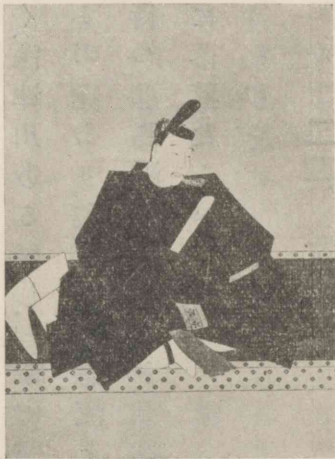
藤原信實

近頃和歌の道殊にもてなされしかば、内裏、仙洞、攝家、執れもとりどりに底を究めさせ給へり。臣下許多聞えし中に、民部卿定家、宮内卿家隆とて家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なり

(一)藤原良經

しかば、この二人には孰れも及ばざりけるに、或時攝政殿宮内卿を召して、當時正しき歌人多く聞ゆる中に、孰れか勝れ侍る。心に思ふ様、ありのまゝに、と御尋ありければ、孰れともわき難く候。とばかり申して、思ふ様ありげなるを、いかにくとあながちに問はせ給ひ

(二)新敎撰集卷五 秋の部下に見える



藤原家定

出でにけり、御覽せられければ、
あけぼよまた秋の
半ばも過ぎぬべし

りかゝる御尋あるべしとはいかでか知るべき。唯もとより面白く覺えて書きつけて持たれけるなめり。その後また民部卿を召して、さきの様に尋ねらるゝに、これも申

夕霜が降つて白く見ゆる。空高くくまらぬ。夕霜が降つて白く見ゆる。空高くくまらぬ。夕霜が降つて白く見ゆる。空高くくまらぬ。

(三)新敎撰集卷六 冬の部に見える

しやる方なくて、

かき、さきの渡すやいづこ夕霜の。くもゐに白き峯のかけ橋。と高やかに詠めて出でぬ。これは宮内卿の歌なりけり。忠實の上手の心はされば一つなりけるにや。 — 今物語 —

關の秋風

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて、かの國へ下りたりけるに、夏の初め、日久しく照りて、民の歎淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を、國司頻りに勧めければ、

あまの川苗代水にせきくだせ

あまくだります神ならば神と詠めるを、みてぐらに書いて、神司して申し上げたりければ、炎旱

(一)平安時代の歌僧、俗名橋永、僧名、生没年不詳。
(二)日野資成の子、姓は藤原、名は金葉集及大日本史には、範國とある。
(三)今の愛媛縣越智郡大三島宮浦なる三島神社。國幣中社。
(四)金葉集卷十雜部下に見える。

(一)唐の太宗皇帝
いなごを呑ん
だ事は貞觀政
要に出てゐる

(二)後拾遺集卷九
羈旅の部に見
える

(三)源有仁 第七
十二代白河天
皇の御孫を善
く詩歌を管絃
した久安三年
八月四十七
五年歿

の天俄に曇りわたりて、大きな雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべ
て緑にかへりけり。忽ちに天災を和ぐる事、唐の貞觀の帝のいなむ
しを吞めりける故事にも劣らざりけり。
この入道は至れるすきものにてありければ、
都をば霞とともになちしかど

あきかぜぞふく白河の關

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さん事念なしと思ひて、人
にも知られず久しく籠りゐて色を黒く日にあたりなして後、陸奥
國の方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露し侍りける。

—古今著聞集—

秋の青柳

花園左大臣家に始めて参りたりける侍の名簿のはしがきに、能
は歌よみと書きたりけり。おとゞ秋の初め南殿に出でて、はたおり

の鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子に人参れと
仰せられけるに、藏人五位たがひて、人も候はずと申して、この侍参
りたるに、たゞさらば汝おろせと仰せられければ、参りたるに、汝は
歌よみなとありければ、畏まりて、御格子おろしさして候に、このは
たおりをば聞くや、一首つかうまつれと仰せられければ、青柳のこと
初めの句を申し出したるを、さぶらひける女房たちをりに合はず
と思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、ものを聞果てずして笑ふ
様やあると仰せられて、とくつかうまつれとありければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて

なつへて秋ははたおりぞ鳴く

と詠みたりければ、おとゞ感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出し
て、賜はせけり。寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにしかりがねは

(一)第五十九代宇
多天皇の時
年號(一五五
九一五七七
年)
(二)平安時代の歌
人の姓は紀貫
之の甥の一人
集撰者の一人
延喜五年(一
五六三年)歿
(三)古今集卷四秋
の部に見える

今ぞなくなる秋霧のうへに
と詠める、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人

こゑくに笑ひけり。さて次の句に、かす
みていにしと言ひけるにこそ、晋もせず
なりにけれ、同じ事にや。——古今著聞集——

住 松ものいは

吉 嘉應二年十月九日、道因法師人々に勸

神 めて、住吉の社にて歌合しけるに、後徳大

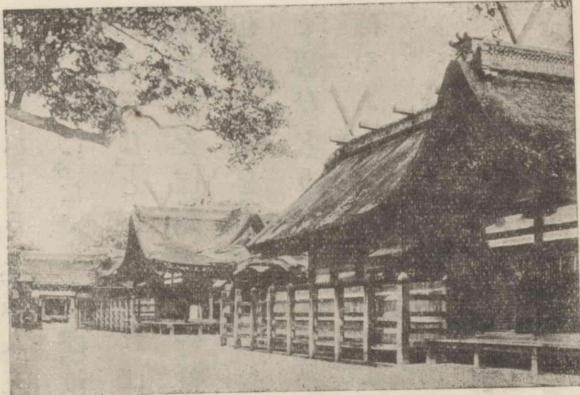
社 寺、左大臣前、大納言にておはしけるが、こ

の歌を詠み給ふとて、社頭、月といふ事を、

古りにける松もの

いは、問ひてまし

むかしもかくやすみのえの月



(一)第八十代高倉天皇の御代一八三〇年
(二)歌僧、俗名藤原敦頼、崇徳天皇の朝に馬寮使として仕へた。寂年未詳。
(三)千載集卷二十、神祇の部に見える。

(一)今の福岡縣(筑後國)山門郡瀬高町

かくなん詠み給ひけるを、判者俊成卿殊に感じけり。世の人々も褒め、しりける程に、その頃、かの家の領、筑紫瀬高の莊の年貢積みたりける船、攝津國に入らんとしける時、悪風に逢ひて、既に入海せんとしけるに、いづくよりか來りけん、翁一人出で來りて、漕直して別事なかりけり。船人怪しみ思ふ程に、翁の言ひけるは、松ものいはばの御句、面白う候ひて、この邊に住み侍る翁の参りつると申せ。と言ひて失せにけり。住吉大明神のかの歌を感ぜさせ給ひて、御體を現し給ひけるにや。

(古今著聞集に據る)

二三 白河殿夜討

白河殿にはかくとも知らしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏の様見て参れ。と仰せければ、親久即ち馳歸り、官軍既に寄せ候。と申しも果てぬに、先陣既に馳來る。その時鎮西八

(一)藤原賴長

人
シロ
ドト

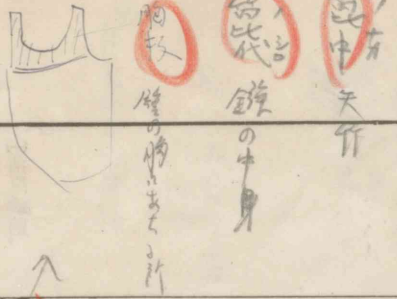
除目
物騒
不利

合はぬ敵
第五十代桓武天皇
柏原天皇と申す
第五十六代

郎申しけるは、爲朝が千たび申しつるはこゝ候、こゝ候と怒りけれども、力及ばず爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて藏人たるべき由仰せけり。八郎、これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來たる、方々の手分をこそせられんずれ。只今の除目物騒なり、人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、唯もとの鎮西八郎にて候はん」とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へうち出で、筋違に東河原にうち渡り、堤を上りに、北へ向つてぞ歩ませける。その勢の中より、五十騎許先陣に進んで押寄せたり。此所を固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かやく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同じ推し伊藤五、伊藤六とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ。清和天皇より爲朝までは九

(一)源經基のこと
清和天皇第六
の皇子眞純親
王の長子とい
ふに六孫王と
い故



裏か
ま

代なり六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け」とぞ宣ひける。
景綱昔より源平兩家天下の武將として、違敷の輩を討つに、兩家の郎等大將を射る事互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ参らせたる身なり。下藪の射る矢立つか立たぬか御覽ぜよ」とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、合はぬ敵と思へども、汝が言葉の優しきに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。かつは今生の面目、または後生の思出にもせよ」とて、三年竹の節近なるを少し押し磨いて、山鳥の尾を以てはいたるに、七寸五分の丸根の筥中過ぎて、筥代のあるをうち食はせ、暫し保つてひようと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎はやには落ちて死ににけり。
伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に参つて、八郎御曹司の

御曹司

二三 白河殿夜討

一四

伊藤五の矢を折る

舌を振ふ

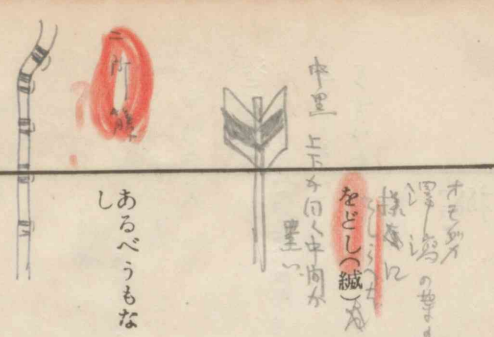
(清原武則)

嫡子 (南)

錦の下

矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ」と申せば、安藝守を始め、この矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、君の御矢に中る者、鎧、冑を射通されずといふ事なし。抑君の御弓勢を確かに拜み奉らばや」と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝にかけて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより愈、兵ども歸服しけりと申し傳へて聞けば、かりなり、眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖し」とぞおぢあへる。

かく口々に言はれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ、何方へも寄せよかし。さらば東の門か」とあれば、兵皆、それもこの門近く候へば、若し同じ人や固めて候らん。唯北の門へ向はせ給へ」と言へば、



剛の者

あるべうもな

「さも言はれたり。今は程なく夜も明けなんす。然れば小勢に大勢駆立てられんも見苦しかりなん」と引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉をどしの鎧に、白星の兜を著、十四差いたる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、救命を蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す様やあるべき。續けや若者どもとて、駈出でられけるを、清盛これを見て、あるべうもなし。あれ制せよ者ども、爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。過すな」と宣ひければ、兵ども前に馳塞がりければ、力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

此所に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは、またなき剛の者がたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引く事やある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へ

鳥許
をこの高名

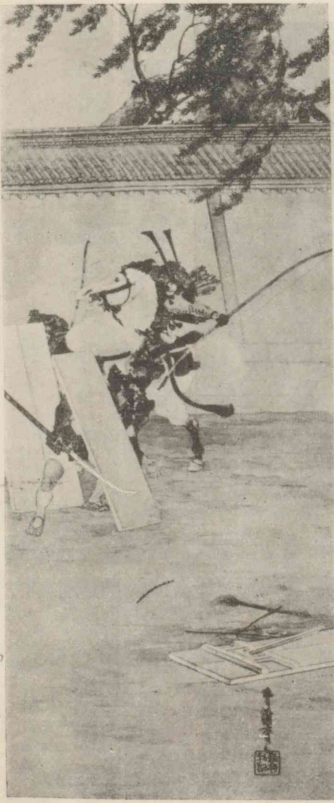
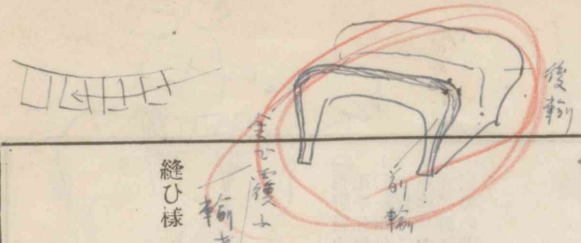
て軍に遭ふ事十五箇度我が手に取つても、たびく多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかぬものを人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん」とて駈出づれば、この高名はせぬに如かず。無益なり。と同僚ども制すれども、元より言ひつる言葉をかへさぬ男にて、夜明けて後に傍輩の「いで八郎の矢目見ん」と言はんには、何とかその時答ふべきされば、日頃の高名も失せなん事の無念なれば、よし／＼人は續かずとも、おのれ證人に立つべし」とて、下人一人相具して黒革をどしの鎧に同じ毛の五枚兜を猪頸に著十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。

門前に馬を駈据る物その物にはあらねども、安藝守の郎等伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊強盜をからめ取る事は數を知らず、合戦の

鷹の如く羽をさし、はまめさつ
て、こしすし、さ、さ、
は、は、羽、の、人
塗籠籐
庄司行末が孫なり
さ、は、さ、さ、
さ、は、さ、さ、

カラム
擲

一定
白蓋
縫ひ様
輪



爲朝奮戦 (谷口香嶺筆)

場にもたびく、に及んで高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや」と申しければ、爲朝一定きやつは引設けてぞ言ふらん。一の矢をば射させん。二の矢を番はん所を射落さん」と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、駈出でて、鎮西八郎こ

れにあり。と名のり給ふ所をもとより引設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひ様にぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふ所を、爲朝よつ引いてひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射

二三 白河殿夜討

一五

草摺の腰まけり、
縫ひ様の輪、
さ、は、さ、さ、
さ、は、さ、さ、



(一)吉野朝の忠臣
正平九年(二
〇一四年)歿
原抄(三十三
年)古今集職
記等神皇正統
の著がある

(二)元弘三年(一
九九三年)

符契を合す

通したる。暫しは矢にかせがれて溜る様にぞ見えし、即ち弓手の方
へ眞逆様に落つれば、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳行けば、下人つ
と馳寄り、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これ
を見て、愈この門へ向ふ者こそなかりけれ。 — 保元物語 —

二四 建武の中興

北畠親房

東にも上野國に源義貞といふ者あり、高氏が一族なり。世の亂に
思を起し、幾何ならぬ勢にて鎌倉へ
うちのぞみけるに、高時等運命窮り
にければ、國々の兵つき従ふ事、風の
草を靡かすが如くして、五月二十二
日にや、高時を始めとして、多くの一
族皆自滅してければ、鎌倉また平ぎぬ。符契を合する事もなかりし



(寫模料資像會) 貞義田新

に、筑紫の國々、陸奥、出羽の奥までも、同じ月にぞ鎮まりにける。六七
千里の間一時に起りあひにしに、時の至り運の極りぬるは、かゝる
事にこそと、不思議にも侍りしものかな。

君はかくとも知らせ給はず、攝津國西の宮といふ所にてぞ聞か
せましましける。六月四日東寺に入らせ給ふ。都にある人々も参り
集りしかば、威儀を整へ、本の宮に還幸し給ふ。いつしか賞罰の定め
あり、兩院、新院をばなだめ申し給ひて、都に住ませ参らす。されど新
院は僞主の儀にて、正位には用ひられず。年號ももとの如く元弘と
號せらる。平治より後、平氏世を亂りて二十六年、文治の初め、頼朝權
を専らにせしより、父子相繼ぎて三十七年、承久に義時世を執行ひ
しより百十三年、すべて百七十餘年の間、おほやけの世を一つに知
らせ給ふ事絶えにしに、この天皇の御代に、掌を反すよりも易く一
統し給ひぬる事、宗廟の御計らひも時節ありけりと、天下舉りてぞ

(一)後伏見、花園
の兩上皇
(二)光嚴院

宗廟

仰ぎ奉りける。

同じき年の冬十月に、先づ東の奥を鎮めらるべしとて、參議右近中將源顯家卿を陸奥守になして遣されぬ。代々和漢の稽古をわざ



(筆秋長田磯) 家顯る據に山靈

とて朝家に仕へ、政務に交る道をのみこそ學びつれ、更途の方にも習はず、武勇の藝にもたづさはらぬ事なれば、たびくいなみ申し、かど、公家既に一統しぬ。文武の道二つなるべからず。昔は皇子、皇孫若しは執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大將にもさゝれしか、今より武を兼ねて藩屏たるべし。と仰せ給ひて、御躬ら旗の銘を書かしめ給ひ、さまざまの兵器をさへ下し賜

藩屏

(一)第九十七代後村上天皇

抽賞

ひぬ。任國へ赴く事も絶えて久しくなりにしかば、古き例をたづねて罷申よまひの儀あり、御前に召し敕語ありて、御衣、御馬などを賜はりき。なほ奥の固めにもと申し受けて、御子を一所伴なひ奉りぬ。かけま(一)くも畏き今上皇帝の御事なれば、こまかには記さず。かの國に著きにければ、誠に奥の方さま、陸奥、出羽の兩國をかけて、皆靡き従ひにけり。同十二月左馬頭源直義の朝臣、相模守を兼ねて下向せり。これも四品上野太守成良親王を伴なひ奉りぬ。この親王後に暫く征夷大將軍を兼ねさせ給ひき。直義は高氏が弟なり。

抑、かの高氏、御方に参れりしその功は誠に然るべし。すゞろに寵幸ありて抽賞せられしかば、偏に頼朝卿天下を鎮めしまゝの志にのみなりにけるにや、いつしか越階して四位に敘し、左兵衛督に任ぜられぬ。拜賀の先にやがて従三位に敘し、程なく參議従二位までに陞せられ、武藏、常陸、下總、三箇國の吏務、守護及び數多の郡莊を賜

理運

はりぬ。弟直義左馬頭に任じ、後に四位に敍せられぬ。昔頼朝ためしなき勳功ありしかど、高位高官に昇る事は亂政なれば、果してその子孫早く絶えぬとぞ申し傳へたる。かの高氏等の先人は、頼朝、實朝の時に親族なりしかども、優遇せられし事もなく、唯家人の列なりき。實朝の八幡宮に拜賀せし日も、地下前驅二十人の中に加へられけり。たとひ頼朝の後胤なりとも、今更登用すべしとも覺えず。況や久しき家人なれば、さしたる大功もなく、かくやは抽賞せらるべきと、怪しみ申す輩もありけりとぞ。關東の高時天命既に窮りて、君の御運を開き給ひし事は、更に人力と言難し。武士たる輩、言はゞ數代の朝敵なり。御方に參りてその家を失はぬこそ餘りある皇恩なれば、更に忠を致し、勞を積みてぞ、理運の望をも企て侍るべき。然るを天の功を盗みて己が功と思へり。なげかはしき事にこそ。かくて高氏が一族ならぬ輩も數多昇進し、昇殿を許されしもありき。され

ばある人の申されしは、公家の御世に復りぬるかと思ひしに、なかなかなほ武士の世になりぬ」とぞありし。 — 神皇正統記 —

二五 人臣の道

北畠親房

きほひ争ふ
前車の轍を見
る

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたす事、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見る事は、誠に有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

(一) 鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべ

(一) 第七十五代崇
徳天皇の御代
鳥羽法皇院政
を攝せられた
頃

制符

語らばる

し。といふ制符たびくありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らばるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、言ひがひなき事になりにけり。

この頃の諺には、一たび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を賜へ。若しは、半國を賜はりても足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、また朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。と言へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふ者は、その初め言葉を慎まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の

言語は君子の樞機
堅き氷は霜を履むより至る
亂臣賊子

(一)堯の時の隱士
(二)支那河南省開封府
(三)堯の時の隱士
五臟六腑

萬姓の主

變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなり行くを末世とは言へるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はん事は、推しても量り奉るべし。若し一國づゝを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況や日本半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面にも恥づる色のなきを、

(一)平良將の第三子。下總國猿島に偽宮を建てて朝儀に擬せられた。三年(一六〇〇年)遂に天慶(一六〇〇年)に誅せられた。

(二)漢の第一代の皇帝。姓は劉名は邦。

籌を帷幄の中にめぐらす

(三)後鳥羽天皇の文治五年(一一八四年)藤原泰衡(四)畠山重忠(五)昔奥州は五十四郡あつた

謀叛の初めと言ふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲り侍りけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈衰へたるにや。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑と言ふ。萬人に勝れたるを傑と言ふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留と言ひて少しきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世の事ぞかし、頼朝の時までも文治の頃にや、奥の泰衡を追討ちしに、自ら向ふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡のうちいづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少き所を望みて、賜はりけりとぞ。こ

れは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

—神皇正統記—

自修文

日本の國號

大森金五郎

我が國は、古くは大八洲の國と稱へられた。これは海中に數多の島が散在してゐる所を形容したものであらう。大八洲とは大彌島の義で、必ずしも八といふ意味ではない。即ち洋々たる海中に數多の島のある所から、かく稱へたものと思はれる。

また葦原の中つ國といふ名稱もある。これは太古に於て、この國の四方に蘆の生茂つてゐた所から、その葦蘆の中にある美地を賞讚した言葉であらう。また豊葦原の中つ國とも、瑞穂の國ともいふ。瑞穂とは、水田があつて、稻の生産が豊かで、その穂の美麗なのを稱へたのであらう。なほ多くの形容詞を添へて、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國、または萬千秋の長五百秋の瑞穂の國など

(一)歴史家、國學院大學教授。慶應三年(一八六六年)生じた。武家時代の研究、大日本全史、中世史論考等の著がある。

(一)日本書紀に見
える。
國見
國の中の高い
所に登つて、
國の形を望み
見ること。
(二)第十代。
(三)今の奈良縣磯
城郡三輪町の
附近。
浦安國
心やすく安泰
な國。
細戈千足國
すべてが足つ
て不足のない
國。
磯輪上秀真國
意味不詳。
玉璫内國
玉璫を造りめ
ぐらした様に
山で圍まれた
内の國。
天の磐船
神代にあつた
堅固な船。
(四)三十卷あり、
晉の陳壽の撰
志の三國
(五)後漢の班固の
撰

と美稱する事もある。千秋萬歳國土の豊かなのを意味した事と
想はれる。また秋津島とも豊秋津洲ともいふ事がある。秋津は蜻
蛉(つと)のとなめの略で、これは神武天皇が國見をなされた時、蜻蛉の
となめせるが如しと仰せられたのから起り、もと大和一國の名
であつたのが、後日本全國の名となつたのであらう。また敷島と
も敷島の倭(やまと)ともいふ。これは崇神天皇が磯城(いそき)に都せられてから
起つた事と見える。敷島の倭も畿内一國の名であつたが、後には
日本全體の名となつたのである。なほその外にも、伊弉諾尊は我
が國を稱して浦安國(うらやすのくに)細戈千足國(ほろごせんじやくのくに)磯輪上秀真國(いそわの上のほろまのくに)など、稱へられ
た事もある。大國主命は玉璫内國(たまがのうちのくに)と言ひ、饒速日命は天の磐船(あめのいはふね)に
乗つて大空からこの國土を見て、虚空見日本國(こゝろみよこほのくに)と稱した。支那の
書には我が國の事を倭と稱へ、魏志(ぎ)の倭人傳(わじん)及び前漢書(ぜんかんしゆ)の地理
志にも、日本人を稱して倭人と言ひ、その後の書物にも、倭人、倭國
などの文字が見えてをる。かくの如く様々な名稱はあるが、神武

(一)推古天皇の
朝に隋に送ら
れた國書の中
に見える。

天皇が大和に幸せられてから、代々の天皇が十數代なほ大和地
方に都せられたので、大和は日本全體を指す名稱となり、大和と
言へば日本國と言ふ様になつて來た。さて漢字が傳はつて後、こ
の大和といふ言葉に漢字を當てはめる事になつて、通常、倭、大倭
などを用ひ、または東方にある國といふ所から、單に東の字を「や
まと」と讀ませ、或は日本即ち日の本、日出づる國などといふ意味
の文字を書いて、これを「やまと」と讀ませたのである。
そこで、日本といふ國號の由來に就いては古來様々の説があ
るが、やはりもとは「やまと」といふ言葉に、日本といふ字を當ては
めたのが根元であらう。我が國の天皇の御事を「日出づる處の天
子」支那の皇帝の事を「日没する處の天子」など、書いた事もある。
この日出づる處といふのが即ち日本といふ意味であつて、初め
は日本と書いても「やまと」と讀んだのであらうが、遂に音讀する
に至つて、今日の國號となつたものと見える。然らばいつ頃から

詔書
天皇の思召を記して天下に公布する文書

歸化人
此所では支那人や朝鮮人が日本に渡來して日本人になつた者

思想家
明治八年新潟縣に生れた。理想理的商業、一休和尚、廣長舌店頭禪等の著がある

日本といふ文字を用ひ始めたかと言ふと、それは判然とは分らない。或は大化の改新の時に、外國に對して詔書に日本天皇と書いたといふ説もあり、或は日本書紀撰定の時にさういふ文字を定めたのであるといふ説もあるが、恐らくは國家がこれを制定する前に、既に歸化人等が「やまと」といふ言葉に様々な漢字を當てはめた中に、日本といふ文字が、最も我が國の名義を現すのに適當であるといふ所から、自然に廣く行はれ、遂に我が國號にこの字を採用する様になつたものと思はれる。かくて畿内の大和一國を指す場合には、奈良時代の頃に大和といふ文字を定め、以て日本全體を呼ぶ場合の倭、若しくは大倭といふ文字と區別する事となつたのである。

—大日本全史—

二六 斷想四片

我等は若い

高島米峯

赤誠横溢し眞情流露する

槿花一朝の榮

池塘春草の夢
朱熹の「偶成」の詩句による。全詩は「少年易老學難成一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」

青年は人生の花である。されど、唯若くして美しきが故に貴いのではない。希望に生き、意氣に燃えるが故に貴いのである。奉公の赤誠横溢し、純潔の眞情流露するが故に貴いのである。既に花である。花ではあるが、僅かに槿花一朝の榮を誇つて、一夜の嵐に忽ち凋落する様な花であつてはならない。その前途には、必然の任務たる結實といふ大業が待構へてをる事を忘れてはならない。即ち、青年はこの大業を成就する爲の準備時代であり、榮養吸收時代であり、身心鍛鍊時代であり、人格陶冶時代である。この時代の努力奮闘が大なれば大なるだけ、その結實もまた大なるを得るのである。

我等は若い。しかし、いつまでも若くてはゐない。池塘春草の夢がまだ覺めないのに、早くも已に秋聲階前の梧葉に訪るゝの歎なきを得ない。この時に當り、あゝ吾老いたりと歎いても、誰も相手にな

芙蓉八朶の峯

つてはくれまい。古句に曰く、
 飛びこんだ力で浮ぶ蛙かな
 人生の一樂
 海拔一萬二千五百六十尺、芙蓉八朶の峯、一たびこれを仰ぎ見る時、何人かその秀靈の氣に打たれない者があらう。
 翻つて思ふに、この一萬二千尺の靈峯も、若しそれ三國に互れる廣大な裾野を無視せんか、到底その存立を可能ならしめる事は出來ない。然り、富士山あつての裾野でなくして、裾野あつての富士山である。
 自ら偉大となるもとより良し、時に或は他をして偉大ならしめるのも、また不可とはしない。いはゆる裾野的役割の如き、實に大役である。大役にしてしかも認められず、酬いられざる裾野的役割に甘んずる者があつてこそ、偉大な人物を世に送り出す事が出来る

(一)論語學而篇に見える語

大道は長安に通ず

(二)李斯の「逐客上書」に見え
 る「泰山不譲
 ニ土壤、故能成
 ニ其大、河海不
 擇ニ細流、故
 能就ニ其深。」
 による。

のである。
 孔夫子曰く、人知らずして愠らず、また君子ならずや。と、敢へて人に知られん事を思はず、敢へて世の酬を受けん事を欲せず、唯爲すべきを爲し、行ふべきを行ひ、これを以て人生の一樂と觀ずる事を得ば、以て君子と稱すべく、以て達人と呼ぶべきではないか。
 裾野か、山か、その境に於て尊卑もなければ、また上下もない。各人その能くする所に従つて選ばんか、蓋し、大道は長安に通ぜん。
 國民の富は國家の富
 極天極地、永遠無窮に榮え行くべき運命にあるもの、即ちこれ儼乎三千年の歴史を有する日本の大帝國である。されど、何の力か能くこの運命の扉を開いて、國家を興隆せしめるであらう。
 看よ、かの巍然として中空に聳える山を、その高きは敢へて土壤を譲らざるが爲ではないか。また看よ、かの汪洋として大海に朝す

陳套

國際聯盟脫
退書
朕惟平曩
世界之國際
復成之國際
盟成之國際
加考命之參
ヒテ亦遺緒
繼承前緒
懈承前緒
有三年其後
力終始協
今次滿洲國
新與當國
國其重當國
ヲ以達之亞
ナラ根除之
ス禍ヲ除之
保界之和平
不爲之聯
盟不幸然
背馳所見之
アリ朕乃チ

る河を。その深きは敢へて細流を選ばざるが爲ではないか。即ち知る、宇宙の厯大も一介の集積に過ぎない事を。國民の富は國家の富である。國民が悉く富んだ時、國家が興隆せざらんと欲しても得べからざるのである。而して此所に達する方途に至つては、唯勤と儉とあるのみである。言葉こそ陳套の様であるが、しかもその意は永久に清新である。

國威八紘に振ふ

今より千三四百年前の世界を看よ。西洋にはイギリスなく、ドイツなく、フランスなく、アメリカもなかつた。強ひて求めて、ローマ法王だけが特殊の光を放つてゐたといふに過ぎない。くらゐの有様ではなかつたか。これに反して東洋には、西方アジアにマホメットの蹶起があり、中央アジアに佛教文化の進展があり、支那は文化の極盛を誇る隋代であり、三韓また支那文化の輸入同化に力を致して、

府ヲシテ
審議院
ヲ設テ
置テ
之ヲ
以テ
法律
ヲ制定
スル
ニ
シテ
是レ
實ニ
立憲
政治
ノ
本
質
ニ
シテ
也
夫レ
我々
日本
ノ
立
憲
政治
ノ
本
質
ニ
シテ
也
夫レ
我々
日本
ノ
立
憲
政治
ノ
本
質
ニ
シテ
也
夫レ
我々
日本
ノ
立
憲
政治
ノ
本
質
ニ
シテ
也

頗る見るべきものがあつた。一言にしてこれを言へば、世界は東洋文化の世界であつた。殊に日本に至つては、時恰も推古天皇の御代で、隋と對等の國交を修めて文物燦然、日出づる處の尊貴を、中外に宣揚してゐたのである。

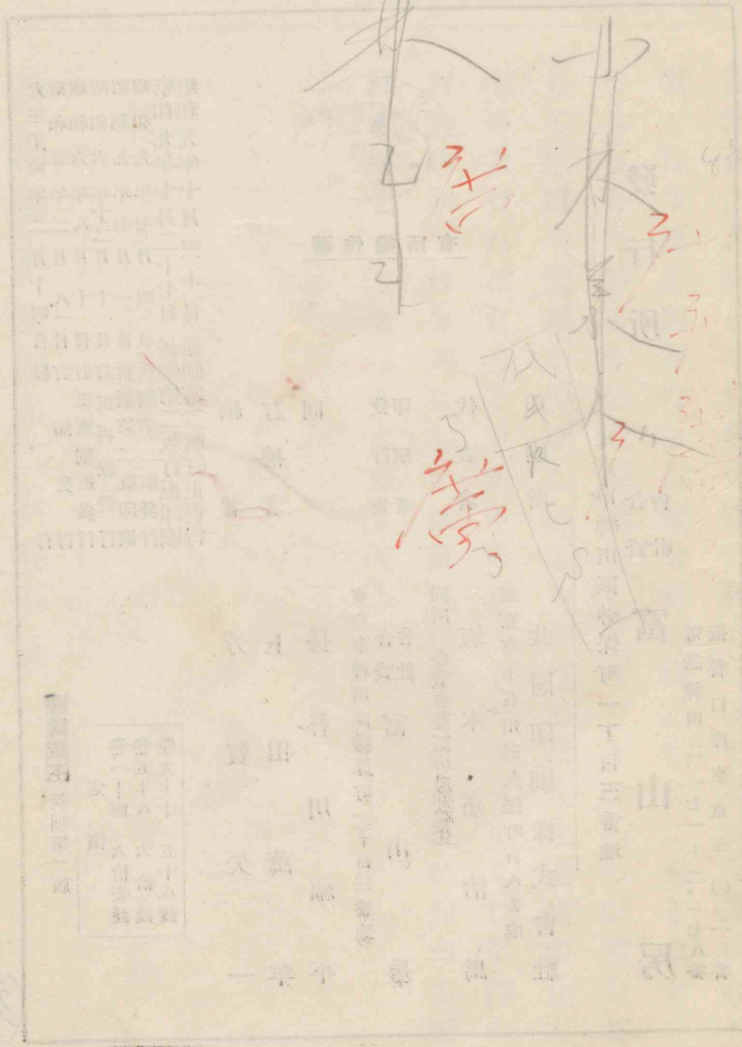
然るに千三四百年後の現代に於ては、東洋の天地は全く歐米文明の爲に征服し盡されたかの觀がないでもない。しかし、そのいはゆる西洋文明の生命もまた、必ずしも永い將來があらうとは思はれない。その後に来るべきものは、即ち東西文明の融合調和の上に築き上げられた新文化でなければならぬ。さうしてその使命は、當然東西文化合流の十字路に立つてゐる日本が負はねばならぬ責務であつて、これを果す事によつて、日本の國光は推古時代のそれにも増して輝くのである。

今や滿洲國の獨立に次いで日本の國際聯盟脫退があり、極東の

D R 及 杉 杉 D
六 全 本 木 木 月

D C # 十 十 D
R R R S 十

Handwritten scribbles and symbols, including a vertical line with a crossbar and some illegible characters.



第一	五
第二	六
第三	七
第四	八
第五	九
第六	十
第七	十一
第八	十二
第九	十三
第十	十四
第十一	十五
第十二	十六
第十三	十七
第十四	十八
第十五	十九
第十六	二十
第十七	二十一
第十八	二十二
第十九	二十三
第二十	二十四
第二十一	二十五
第二十二	二十六
第二十三	二十七
第二十四	二十八
第二十五	二十九
第二十六	三十

山 氣

第一 五
第二 六
第三 七
第四 八
第五 九
第六 十
第七 十一
第八 十二
第九 十三
第十 十四
第十一 十五
第十二 十六
第十三 十七
第十四 十八
第十五 十九
第十六 二十
第十七 二十一
第十八 二十二
第十九 二十三
第二十 二十四
第二十一 二十五
第二十二 二十六
第二十三 二十七
第二十四 二十八
第二十五 二十九
第二十六 三十

小林乙二

1125